

Title	公開情報による新たな情報リスクに対応した、インターネット検索による情報モラル教育用の教材
Sub Title	Material for information moral education for a new information risk caused by public and personal information using Internet search
Author	金谷, 武明(Kanaya, Takeaki) 中村, 伊知哉(Nakamura, Ichiya)
Publisher	慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科
Publication year	2014
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2014年度メディアデザイン学 第387号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40001001-00002014-0387

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修士論文 2014年度（平成26年度）

公開情報による新たな情報リスクに対応した、
インターネット検索による情報モラル教育用
の教材

慶應義塾大学大学院
メディアデザイン研究科

金谷 武明

本論文は慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科に
修士(メディアデザイン学)授与の要件として提出した修士論文である。

金谷 武明

審査委員：

中村 伊知哉 教授 (主査)

加藤 朗 教授 (副査)

稲見 昌彦 教授 (副査)

修士論文 2014年度（平成26年度）

公開情報による新たな情報リスクに対応した、インターネット検索による情報モラル教育用の教材

カテゴリー：デザイン

論文要旨

近年、有名人だけでなく一般の人々の情報も、インターネットで検索やソーシャル・メディアなどを使って調べられることが多くなってきた。ビジネスや人材採用などの場でも人物に関する検索が行われるなど実用的な活用がされる一方で、インターネットで炎上が起こった際に、インターネットで簡単に個人が特定され、学校や会社から処分を受けるといった事態も発生している。今後ますますインターネット上の公開情報が活用されていくことを考えると、自分自身に関するネット上の公開情報はインターネット上の新しいリスクとして情報モラルで取り扱うべき問題である。しかし、現在の情報教育ではこうしたリテラシーには対応しきれていない。そこで本研究では、インターネット検索を利用した情報モラル教育を開発し、大学生に対する聞き取りや、大学生・高校生に対する模擬授業などを行い、その有用性を検証した。その結果、情報モラルのリテラシーの向上に有効であることが確認できた。そこでそれを踏まえて、現在はあまりカバーされていないこの分野に関して、インターネット検索を利用した情報モラル教育用の教材を提案する。

キーワード：

インターネット検索, 情報モラル, 情報リテラシー, 教科「情報」, 公開情報によるリスク

慶應義塾大学大学院 メディアデザイン研究科

金谷 武明

Abstract of Master's Thesis of Academic Year 2014

Material for Information Moral Education for a New
Information Risk Caused by Public and Personal
Information using Internet Search

Category: Design

Summary

In recent years, information of not only celebrities, but also ordinary people has become a search topic on the internet using internet search and social media. Many cases of this are seen in business or hiring. While searches are used for practical reasons, there are cases where people are easily identified on the Internet when an incident happens and those said people are then punished by their school or company. In the near future, public information about oneself on the internet will be utilized and accessed even more, which will become a new risk and should be considered as an issue of information morals. However, this issue is not currently covered by information moral education. In this research, material for information moral education using internet search is designed. Interviews with high school students were held. Classes for university students and high school students were also held to examine the attendees' change in attitudes. The result confirms that the material is useful for improving information morals. This thesis proposes a material for information moral education using Internet search for this area that is currently not well covered.

Keywords:

Internet Search, Information Moral, Information Literacy, Information Risk

Graduate School of Media Design, Keio University

Takeaki Kanaya

目 次

第1章 序論	1
第2章 発生するリスクとその対策	3
2.1. 一般の人々に関する公開情報の増加	3
2.1.1 情報増加の背景	3
2.1.2 公開情報が増えてきたことによるポジティブな面	4
2.1.3 公開情報が増えてきたことによるネガティブな面	4
2.2. 公開情報のリスク	5
2.2.1 炎上発生から処分までの流れ	5
2.3. ソーシャル・メディアによる個人の特定	6
2.3.1 ソーシャル・メディアのプロフィール情報や投稿内容	6
2.3.2 交友関係のある人物のプロフィールや投稿内容	7
2.3.3 他のソーシャル・メディアや掲示板などの情報	7
2.4. 検索エンジンによる個人の特定	7
2.4.1 検索エンジンの活用のされ方	7
2.4.2 名前や名前と学校名などを組み合わせた検索	8
2.4.3 ソーシャル・メディアでの調査の補完	8
2.4.4 他のソーシャル・メディア上のアカウントの特定	8
2.5. 関連事例：個人が特定された事例	8
2.5.1 炎上原因の変化	8
2.5.2 2011年型の炎上例	10
2.5.3 2013年型の炎上例	11
2.6. 情報モラル教育	12
2.7. 新しいリスクとその対策	14

2.8.	調査 1 : 大学生へのグループ・インタビュー	14
2.8.1	上智大学の学生を対象としたグループ・インタビュー	14
2.8.2	インタビューの進め方	14
2.8.3	インタビューから得られたコメントとその考察	15
第 3 章	インターネット検索で学ぶ情報モラルの講義の実施	17
3.1.	インターネット検索で学ぶ情報モラルの講義	17
3.1.1	概要	17
3.1.2	目的	17
3.1.3	デザイン	18
3.1.4	講義の流れ	19
3.1.5	講義の評価	20
3.2.	品川女子学院での授業とその考察	20
3.2.1	講義内容	20
3.2.2	講義の観察	20
3.2.3	講義直後のアンケート結果の考察	21
3.2.4	1 か月後の調査結果の考察	21
3.2.5	特徴的なコメントなど	22
3.2.6	まとめ	22
3.3.	成蹊学園での授業とその考察	23
3.3.1	前回の講義からの改善内容	23
3.3.2	講義内容	23
3.3.3	講義の観察	23
3.3.4	講義直後のアンケート結果の考察	23
3.3.5	1 か月後の調査結果の考察	24
3.3.6	特徴的なコメントなど	24
3.3.7	まとめ	25
3.4.	大学生 (上智大学・慶應大学) を対象とした授業とその考察	25
3.4.1	前回の講義からの改善内容	25
3.4.2	講義内容	26

3.4.3	講義の観察	26
3.4.4	講義直後のアンケート結果の考察	26
3.4.5	特徴的なコメントなど	26
3.4.6	1か月後の調査結果の考察	27
3.4.7	まとめ	28
3.5.	評価	28
3.5.1	インターネットへの情報公開の意識の変化について	28
3.5.2	評価方法	28
3.5.3	評価項目	28
3.5.4	評価	29
第4章	インターネット検索と情報モラル等についての調査	30
4.1.	サーベイおよび回答者について	30
4.2.	全体的な傾向	31
4.2.1	主な利用する検索エンジン（複数回答可）	31
4.2.2	検索オプションの利用状況について	32
4.2.3	検索スキルと検索の仕組みの理解度（正解率）	32
4.2.4	自分に関する情報検索の頻度	34
4.2.5	最もよく利用するソーシャル・メディア	35
4.2.6	主なソーシャル・メディアの利用頻度	36
4.2.7	情報投稿時の公開範囲の意識	37
4.2.8	問題投稿の経験の有無	38
4.2.9	平常時でない状態での投稿の有無	39
4.2.10	個人的な情報に対する意識	39
4.2.11	友人の不適切な投稿への対応	40
4.2.12	情報教育の受講経験	41
4.2.13	情報モラル教育の有用性	42
4.3.	検索スキルの高低による分析	42
4.3.1	分析方法	42
4.3.2	平均年齢と検索を始めた年齢（検索スキル別）	43

4.3.3	実名での投稿経験率	43
4.3.4	学校名表示率	44
4.3.5	匿名アカウントなどのアカウント名使い回し率	44
4.3.6	公開範囲意識率	44
4.3.7	投稿内容意識率	45
4.3.8	友人の不適切な投稿への対応	45
4.3.9	「わからない」という回答率	45
第5章	講義のための教材とシラバス	47
5.1.	講義のための資料とそのシラバス	47
5.2.	講義概要	47
5.2.1	本講義の目的	47
5.2.2	対象	48
5.2.3	講義の流れ	48
5.3.	シラバス	51
5.4.	名前の検索についての補足	51
5.5.	注意事項	52
5.6.	講義に必要な知識とその補足	53
第6章	結論	54
6.1.	まとめ	54
6.1.1	本研究の目的	54
6.1.2	検証結果	54
6.1.3	サーベイの結果	55
6.2.	今後の課題	55
6.2.1	インターネット検索以外の個人の特定方法について	55
6.2.2	インターネット検索の公開情報のポジティブな活用	55
6.2.3	社会のより豊かな発展のために	56
	謝辞	57

参考文献	59
付録	60
A. 検索リテラシーと情報モラルについてのアンケート	60
B. インターネット検索で学ぶ情報モラル講座用教材	68

目 次

2.1	問題投稿による炎上事件の推移	10
4.1	主に利用する検索エンジン	31
4.2	検索オプションの利用状況	32
4.3	検索スキルと検索の仕組みの理解度（正解率）	34
4.4	自分に関する情報検索の頻度	35
4.5	最もよく利用するソーシャル・メディア	36
4.6	主なソーシャル・メディアの利用頻度	37
4.7	情報投稿時の公開範囲の意識	38
4.8	問題投稿の経験の有無	38
4.9	平常時でない状態での投稿の有無	39
4.10	個人的な情報に対する意識	40
4.11	友人の不適切な投稿への対応	41
4.12	情報教育の受講経験	41
4.13	情報モラル教育の有用性	42
6.1	情報モラル講座用教材 1	68
6.2	情報モラル講座用教材 2	69
6.3	情報モラル講座用教材 3	69
6.4	情報モラル講座用教材 4	70
6.5	情報モラル講座用教材 5	70
6.6	情報モラル講座用教材 6	71
6.7	情報モラル講座用教材 7	71
6.8	情報モラル講座用教材 8	72

6.9	情報モラル講座用教材 9	72
6.10	情報モラル講座用教材 10	73
6.11	情報モラル講座用教材 11	73
6.12	情報モラル講座用教材 12	74
6.13	情報モラル講座用教材 13	74
6.14	情報モラル講座用教材 14	75
6.15	情報モラル講座用教材 15	75
6.16	情報モラル講座用教材 16	76
6.17	情報モラル講座用教材 17	76
6.18	情報モラル講座用教材 18	77
6.19	情報モラル講座用教材 19	77
6.20	情報モラル講座用教材 20	78
6.21	情報モラル講座用教材 21	78
6.22	情報モラル講座用教材 22	79
6.23	情報モラル講座用教材 23	79
6.24	情報モラル講座用教材 24	80
6.25	情報モラル講座用教材 25	80

表 目 次

4.1	検索スキルと検索の仕組みの理解度（正解率）	33
4.2	主なソーシャル・メディアの利用頻度	36
4.3	平均年齢と検索を始めた年齢（検索スキル別）	43
4.4	実名での投稿経験率	43
4.5	学校名表示率	44
4.6	匿名アカウントなどのアカウント名使い回し率	44
4.7	公開範囲意識率	45
4.8	投稿内容意識率	45
4.9	友人の不適切な投稿への対応	45
4.10	「わからない」という回答率	46

第1章

序

論

近年、有名人だけでなく一般の人びとの情報も、インターネットで検索やソーシャル・メディアなどを使って調べられることが多くなってきた。初めて会う人物について事前にネットで調査することはビジネスなどでもすでに広く行われており、人材採用の際にインターネットでの評判を調査するといった活用も行われはじめている。

こうした実用的な活用がされる一方で、インターネットで炎上が起こった際など、インターネットで簡単に個人が特定され、学校や会社から処分を受けるといった事態も発生している。また、自分に関するインターネット上の情報は、自分自身で投稿した情報以外にも、他人によって悪意なく、思いがけず公開されている情報もあり、自分自身の投稿を気をつけるだけでは自分自身のインターネット上の情報の管理としては不十分な事態となっている。

インターネット上で自分自身を調べた時に出てくる情報は、他人が自分について調べた時に最初に得る情報であり、ネット上の自分自身の第一印象となりうる。今後ますますインターネット上の個人に関する情報が活用されていくことを考えると、自分自身に関するネット上の公開情報はインターネット上の新しいリスクとして情報モラルで取り扱うべき問題である。しかし、現在の情報教育ではこのようなネット上に公開された自分自身に対する情報をどう管理するか、といった教育には対応しきれていない。

本研究では、自分に関する情報を検索するスキルを身につけることにより、自分自身および他人によって投稿された自分に関する公開情報をチェック出来るだけでなくネット上の自分自身に関する情報をきちんとコントロールできるようになり、情報公開についてのリテラシー向上に有効であることを検証し、最終的な

講義用の教材を提案する。

本論文は以下のように構成されている。第2章では研究の背景として、一般の人びとに関するインターネット上の公開情報が増えてきたこと、そこから発生するリスクについて述べ、グループ・インタビューを行い、そのリスクに対する教育に必要な要素を抽出した。第3章では提案を検証するために行った講義について考察を行い、第4章では検索スキルや情報リテラシーなどについて行ったサーベイについてまとめる。第5章では最終的な講義案をまとめ、第6章において本研究のまとめと今後の課題について述べる。

第2章

発生するリスクとその対策

2.1. 一般の人々に関する公開情報の増加

2.1.1 情報増加の背景

一般の人々についてのインターネット上の情報がここ数年で急激に増えてきた背景としては、いくつかの理由があげられる。

1. Twitter や Facebook といったソーシャル・メディアの流行により、情報の投稿がしやすくなったことや、これまでインターネットで情報を投稿してこなかった人々が写真や動画も含めて気軽に投稿をするようになったこと。
2. 友人や知人など本人以外の者による、自分に関する情報の投稿が増えてきていること。ソーシャル・メディアなどでは、投稿の中で他人について言及したり他人が写る写真を共有することがある。
3. スマートフォンの普及により、いつでも投稿が行えるようになったこと。
4. 学校や公的機関などがインターネット上での情報公開を積極的に行うようになったこと。例えば学校や教育機関などによる表彰や、スポーツ大会の公式記録など。これまで紙で公開されてきた情報が、個人の実名や学校名とともに公式記録としてインターネット上でも一般公開されるようになってきた。第3章で詳しく述べる講義の受講者からも、数年前参加したスポーツ大会での公式記録が見つかった、という声は多く聞かれた。こうした公式記録では実名と学校名などが結びついてしまうことは見逃せない事実である。

2.1.2 公開情報が増えてきたことによるポジティブな面

- 手軽な事前調査

インターネットで、ある人物について名前などを検索したりソーシャル・メディアなどを調査することで、その人物について学歴や職歴、活動している主な地域、所属する学校や企業、最近の状況など様々な情報が分かることがある。そのため、

- 企業の人事部による、採用のための人物の調査
- ビジネス上の取引先についての調査

など、実用的で様々な用途に活用されている。

- インターネットでの積極的なセルフプロモーション

インターネット上で自分自身の情報が調べられることを積極的に捉え、公開情報を調整することで自分自身のブランディングを図り、評判を高めビジネスなどに繋げているケースも存在する。

2.1.3 公開情報が増えてきたことによるネガティブな面

- 炎上から個人が特定され、社会問題へ

インターネット上でいわゆる炎上が発生した際に、当人やその友人、家族などの個人がインターネット上の公開情報から特定され、学校や内定先、勤務先企業へ連絡がされ、その結果、退学・停学や内定取り消し、懲戒処分といった事態が近年多数発生し、社会問題となっている。

- 公開情報の管理不足による炎上の発生

古い情報を更新しなかったために誤解が生じ、炎上などに繋がる可能性がある。例えば、実際には20歳を過ぎているがソーシャル・メディアのプロフィールに19歳と書いたまま更新していなかった場合に、飲酒の写真などを投稿することで未成年が飲酒したと誤解される可能性がある。

2.2. 公開情報のリスク

2.2.1 炎上発生から処分までの流れ

インターネット上の公開情報がリスクとなる代表的なケースとしては、インターネットで炎上が発生した際に個人が特定されることに使われるケースがあげられる。インターネット上で炎上が起こった際によく見られる一連の流れを以下に示した。

1. 炎上の発生

何らかのきっかけにより、インターネット上で（主にソーシャル・メディアで）炎上が発生する。

2. 個人の特定のための調査開始

炎上を起こした人物について特定するための情報の調査が開始される。

- 把握したい情報

- － 実名
- － 学校名（企業名）
- － その他、その人物に関する関連情報

- 調査対象

- － ソーシャル・メディアのプロフィールを確認し、実名、ニックネーム、学校名、活動地域などを確認
- － 上記で得た情報をもとにした他のソーシャル・メディアでの同一人物の情報の調査
- － 匿名の場合はID やアカウント名を使いまわしている別サービスのアカウントを探すためにIDなどでインターネット検索で調査
- － ソーシャル・メディアで交流の見られる友人の学校名、写真、投稿内容の調査
- － 判明した情報をキーワードとしてインターネット検索

3. 個人の特定

上記調査により実名、学校名、交友関係など個人が特定される。

4. 収集された情報の公開

収集された情報がインターネット上で経緯や事態の背景とともに公開される。

5. 情報の拡散

こうして公開された情報は、見知らぬ第3者の手によって次々と拡散されていく。この行為は悪意を持った人々によって行われることもあれば、正義感の強い人によって行われることもある。

6. 学校や勤務先に連絡

炎上のきっかけとなった行為が社会通念上問題がある行為であったり、飲酒運転など法律に触れる行為であった場合に学校や勤務先、内定先などにその事実が連絡される。

7. 処分

退学・停学、内定取り消し、懲戒処分といった処分がくだされる。

2.3. ソーシャル・メディアによる個人の特定

2.3.1 ソーシャル・メディアのプロフィール情報や投稿内容

次にこうした炎上から個人が特定される流れの中で実際にどのように個人が特定されているかを考察する。まずはソーシャル・メディアが利用されるケースである。

インターネット上での炎上は10年以上前から見られ、近年見られる炎上の多くはTwitterなどのソーシャル・メディア上での投稿をきっかけに発生している。ソーシャル・メディアでは通常プロフィールを記入する項目があり、その項目は会員のみでの限定公開とされるケースもあるが、インターネット上で一般公開されるケースもある。そのため、ソーシャル・メディア上の投稿についてその人物が調べられる際には、そのアカウントのプロフィールがまず参照される。ここに実

名や学校名が表示されている場合も多くあるため、ここで個人を特定するのに必要な情報がある程度判明する場合も多い。

2.3.2 交友関係のある人物のプロフィールや投稿内容

ソーシャル・メディア上で交流のある人物などの情報が参照される場合がある。例えば炎上した人物についてソーシャル・メディア上では詳しい情報が得られなかった場合、ソーシャル・メディア上で頻繁に交流が見られる人物は実際に学校などの友人である可能性が高いと推察できるため、詳しく調べられることがある。その友人の投稿から実名や学校などが判明したり、その友人の別のサービス上のアカウントや、その友人の所属するサークルのHP などから炎上させた人物が特定されたケースもある。

2.3.3 他のソーシャル・メディアや掲示板などの情報

炎上した人物がソーシャル・メディア上で実名は出しているが学校名がわからない場合、または匿名であった場合など、その同一人物の別のサービスでのアカウントが調べられる場合がある。これは過去に利用していたソーシャル・メディアなどでは今よりも多くの情報を出している場合も多いためである。匿名アカウントでもそのアカウント名やIDを他のサービスで使いまわしていることが多いため、別サービスのアカウントは案外簡単に発見できることも多い。こうした別サービスでの同一人物のアカウントを調べることでより多くの情報が判明することがある。

2.4. 検索エンジンによる個人の特定

2.4.1 検索エンジンの活用のされ方

次に炎上から個人を特定する流の中でインターネット検索が利用されるケースを考察する。果てしなく広がっていくインターネットで情報を探す手段として検

検索エンジンは非常に大きな役割を果たしている。しかし、炎上が発生した場合に個人が特定される際にも検索エンジンは大きな役割を果たしている。

2.4.2 名前や名前と学校名などを組み合わせた検索

あらかじめ名前がわかっている場合はその名前をとりあえず検索してみたり、ソーシャル・メディアなどで実名と学校名が特定できた場合などは、名前と学校名を入れた検索を行うことで、新たな情報が出てこないかどうかを調べることや、その情報の事実確認に利用されることもある。

2.4.3 ソーシャル・メディアでの調査の補完

ソーシャル・メディアで得られた情報が下の名前と学校名のみであった、といった場合にとりあえず下の名前と学校名での検索を行い、何か個人を特定できるような追加情報が得られるかどうかを試してみるなど、ソーシャル・メディアで得た情報の補完的に行われるケースがある。

2.4.4 他のソーシャル・メディア上のアカウントの特定

2.3.3でも述べたとおり、現在主に利用するソーシャル・メディア上では学校名を出さないなど気をつけていた場合でも、以前利用していた別サービスでは学校名を表示していた場合がある。そうした同一人物の別サービスのアカウントを探すのにアカウント名やID名を検索するといった用途に利用される場合がある。

2.5. 関連事例：個人が特定された事例

2.5.1 炎上原因の変化

ソーシャル・メディア上で発生する炎上は2010年頃から見られ、2011年には社会問題化した。それ以来相当な件数の炎上が発生している。情報モラル教育を専

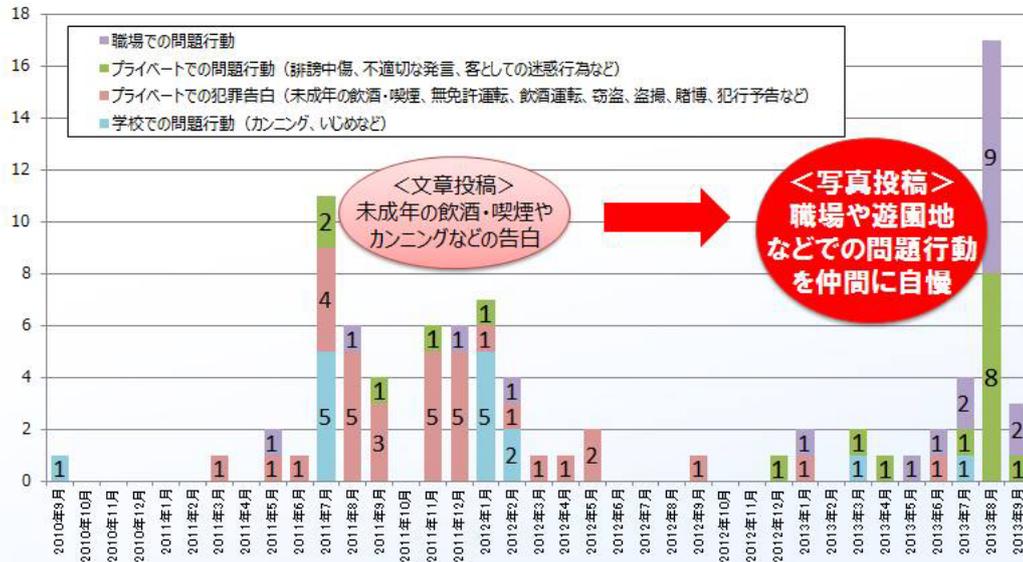
門とする工藤陽介氏（株式会社デジタルアーツ）によると、こうした近年多く見られるタイプの炎上もいくつか分類することができ、時期によって流行があることがわかった [6]。2011 年ごろから発生した問題投稿による炎上の原因の推移を図 2.1 に示す。

2011 年時の炎上は、カンニングやいじめといった学校での問題行動の告白や、未成年の飲酒、喫煙などプライベートでの犯罪行為の告白が多かったが、2013 年には、客として入った店での問題行動や、勤務するお店での従業員による問題行動など、プライベートや職場での問題行動が炎上のきっかけとなることが増えた。また、それが写真付きで投稿されているのが特徴である。

2011 年型の炎上と 2013 年型の炎上について、それぞれの代表的な事例を簡単に紹介する。

問題投稿による炎上事件の推移

DigitalArts.



スマホの普及 × 「SNSアプリ」や「カメラアプリ」
→ 写真投稿による炎上の増加

DigitalArts.

2

Copyright © Digital Arts Inc. All Rights Reserved.

図 2.1: 問題投稿による炎上事件の推移 [6]

2.5.2 2011年型の炎上例

Case1. 大学生 A が Twitter でカンニングを自白し炎上

- 事実 :
大学の定期試験でカンニングしたと Twitter で発言し、炎上
- 個人情報特定の流れ :
Twitter のプロフィールから実名のみ判明
交流の多いフォロワー A のプロフィールからフォロワー A の大学名判明
交流の多い別のフォロワー B の実名が判明

投稿主の名前とフォロワー B の名前を合わせた検索からフォロワー A の所属する大学のとあるサークルの HP が判明

これにより、投稿主もフォロワー A と同じ大学と確定

- 処分：
不明

Case2. 大学生がプライベートでの犯罪（飲酒運転）を Twitter で告白し炎上

- 事実：
Twitter で飲酒運転していることを実況 Tweet。眠い、とも Tweet し、危険性の高さを伺わせる
- 個人情報特定の流れ：
Twitter のプロフィールから下の名前（ひらがな）と大学名、サークル名判明
サークルの HP からは情報は判明せず
mixi から本名判明
- 処分：
処分不明、大学からほぼ同タイミングで学生向けにソーシャル・メディアを利用する際の注意喚気が発表される
- 補足
運転していたのは自動車ではなく、実は自転車運転だったという説もあるが
事実関係は不明

2.5.3 2013 年型の炎上例

Case 3. 冷蔵庫にふざけて入った写真を Twitter に投稿し炎上

- 事実：
客として訪れたスーパーのアイスのショーケースに横たわっている写真を Twitter に投稿し炎上

- 個人情報特定の流れ
Twitter のプロフィールなどから撮影者の名前、所属など判明
- 処分：
退学（学校から発表あり）
書類送検
- 補足：
投稿主が食品を取り扱う調理師の学校に通っていたことが炎上の原因の一つでもあり、重い処分に繋がった理由であろう

Case4 飲食店の従業員がお店の冷蔵庫に入った写真を掲載し炎上

- 事実：
飲食店の従業員がお店の冷蔵庫にふざけて入った写真を掲載
- 個人情報特定の流れ
Twitter のプロフィールなどから撮影者の名前、所属など判明
- 処分：
店舗休業から閉店へ
株価下落
学校の処分不明
- 補足：
飲食店の従業員として、衛生上問題のある行為であることが炎上の原因の一つであり、閉店という決定に至った理由であろう

2.6. 情報モラル教育

このように一般の人々の情報が検索されるようになりつつあることは実用的でポジティブな面がある反面、炎上から個人が特定され、処分を受けるといった社

会問題にも繋がり、ちょっとした悪ふざけが一生取り返しの付かない結果となっている事態も発生している。

こうした問題への対応としては情報モラル教育が期待される。情報モラル教育については、平成15年度より高校で必修科目として行われているが、実際のところこうした新しい問題には追いついていないのが現状である。

これにはいくつか理由があげられる。

- 情報モラルでカバーすべき領域はインターネット上の著作物の問題やコミュニケーションの問題、詐欺や様々な悪意ある情報の回避方法など、すでに数多くの情報モラルの問題が存在しているため、現在の教育プログラムで十分な時間を割くのは難しい。
- 情報モラルでの問題としては、現在クローズドのコミュニティでのコミュニケーションの問題のほうが世間の関心も高い。
- 一口にソーシャル・メディアといっても、例えばTwitterとFacebookで比べてみてもその特性や公開性、他人とのつながり方など大きく異なり、そうした特性の違いを踏まえてしっかりと教育するには教える側のリテラシーが追いついていない。
- 教科書の改定など、公的な教育プログラムとしては新たな問題に対応するのに最短でも1年から2年程度の時間がかかり、最新の問題に対応できない。
- 本章関連研究で述べたとおり、ソーシャル・メディア上での炎上にもトレンドがあり、ある問題だけに対応したモラル教育を行った場合、その問題の対策には効果があったとしても、同じ炎上でも別の原因で起こる新たな問題への対応が困難な場合がある。例えば、2011年型の炎上を対象としたモラル教育では、2013年型の冷蔵庫に入る若者を止めることはできないだろう。

2.7. 新しいリスクとその対策

このように、新たな問題には対応が間に合わない、すでにトピックが膨大にある、新たなネットサービスへの対応が困難といった教える側のスキルの問題、など、既存の情報モラル教育ではカバーしにくい状況である。そこで新たな対策が必要となる。ポイントは、1)すでに公開されている情報に問題がないかどうかを確認すること、2)今後の情報の投稿に問題がなくなり、炎上に繋がるような投稿がなくなること、である。

1については、すでに公開されている情報の確認についてはインターネット検索を活用することでカバーすることができる。2については、1を知ることによって多少の萎縮効果が働き情報の公開に問題がなくなるのではないか。また、2については情報を公開する際に何らかのアラートを表示することで問題投稿を止められる可能性が考えられる。

そこで、こうした仮説について実際に効果がありそうかどうかを確認するため、大学生を対象としたグループ・インタビューを実施した。

2.8. 調査1：大学生へのグループ・インタビュー

2.8.1 上智大学の学生を対象としたグループ・インタビュー

インターネット検索による情報モラル教育法の有用性を調査するため、上智大学の学生10名(平均年齢20.6歳)を対象に、インターネット検索による自分自身の情報の検索の模擬授業や、検索スキル、ソーシャル・メディアへの情報の投稿時の意識などについてインタビューを行った。

2.8.2 インタビューの進め方

インタビューでは、次の項目について話を進めた。

- インターネットの炎上について

- ソーシャル・メディアとの関わり方、意識
- 自分自身に関する情報の検索方法のワークショップ
- 感想

2.8.3 インタビューから得られたコメントとその考察

インタビューの結果、主に利用するソーシャル・メディアのトレンドが高校生や大学生の世代の間でも細かく異なる場合もあることがわかった。

- Facebook は大学生はあまり熱心にやらない。写真を見るためのツール。
- LINE は利用するものの、友人との情報交換が中心で、LINE のタイムラインはあまり利用しない。しかし、高校生の世代は、LINE のタイムラインをより活用していると感じている。
- Twitter は上の学年になると積極的に活用しているが、若い世代ほどケータイサイト的な感覚で使っており、意味のあることを書かない傾向がある。

このように、高校生、大学生といった世代の中でも、世代ごとに利用するサービスが異なったり、同じサービスでも利用の仕方が異なる場合があることがわかった。情報の公開時に何らかのアラートを表示する場合、サービスごとに開発する必要があるのであるため、ある特定のサービスのための機能を開発することは時の経過とともに使われなくなる可能性もあり、根本的な解決とはならない可能性が高いことがわかった。

また、自分自身に関する情報の検索方法については、多くの参加者が過去に自分自身に関する検索を行った経験があったものの、ほとんどの参加者が、これまで確認したことのないインターネットに公開された自分に関する情報（スポーツ大会、学校による表彰、大学の合格体験記など）を確認した。これはある程度の頻度で検索を行う必要を示している。また、自分に関する情報が沢山出てきた参加者も、あまり出てこなかった参加者も、ほぼ全員が、今後の自分自身の情報公開は注意深く行おうと思った、との回答を得た。

そこでこうした自分自身に関する公開情報の検索方法をしっかりと教えることで、既存の公開情報のチェックが行えるだけでなく、今後の情報の公開に対しても注意深く変わるのではないか、という仮説を得た。第3章ではそれを検証するために行った講義について考察する。

第3章

インターネット検索で学ぶ情報モラルの講義の実施

3.1. インターネット検索で学ぶ情報モラルの講義

3.1.1 概要

第2章で行った上智大学の大学生を対象としたグループ・インタビューの結果を踏まえ、自分自身に関するインターネット上の公開情報という新しいリスクについてのリテラシーの向上を目的としたインターネット検索講座をデザインし、品川女子学院の生徒、成蹊学園の生徒、慶応義塾大学および上智大学の大学生を対象に、実際に3回の講義を行った。ここではその反応や講義後に行った調査結果を考察し、本講義の有用性を検討する。

3.1.2 目的

本講義の目的は、自分自身についてのインターネット上の情報を検索するスキルをワーク・ショップ形式で身につけることで、公開情報に対するリテラシーを向上することである。具体的には、

- インターネット上の自分の公開情報について把握する
- 今後の情報の投稿の際には公開範囲や投稿内容を意識し、公開範囲に応じた内容を投稿するようになる

ということを目的とする。

3.1.3 デザイン

本講義は、高校や大学で実際に活用されることを念頭に置き、次の点を考慮しデザインした。

- 時間は90分一コマ。
- 講義の時間は最低限に留め、実際に手を動かす検索の練習の時間を多く取った。
- 授業に対する関心を高めるため、まず最初に自分の名前を検索する時間を取った。
- 名前の検索に必要であり検索に多用する検索スキルとして、フレーズ検索、マイナス検索、サイト内の検索と3つの検索テクニックに絞り込んだ。
- パソコンがなかった場合でもタブレットやスマートフォンでも代用できるようにデザインした。
- 検索結果に実際に削除したいと思われる内容があった場合の対処方法についてはケース・バイ・ケースであり、非常に大きいテーマであるため最低限の基本的な事項にとどめた。なお、インターネットからの情報の削除については本論では取り扱わない。
- 検索の仕組みについては、高校生や文系の大学生には若干難易度が高いものの、次のような理由により基礎的な内容を簡潔に盛り込んだ。
 - － インターネット検索の仕組みをきちんと理解することでインターネット怖いと萎縮させないため
 - － 情報をインターネットで公開する際にその投稿が将来的に検索されるか、という判断がつくようにするため
 - － 削除したい情報があった場合にどの情報を削除すべきか、判断つくようにするため

3.1.4 講義の流れ

講義の詳しい流れについては第 5 章にて示した。ここでは講義の流れを簡単に示す。

- 導入部
 - － 自分の名前で検索
まず最初に自分の名前の検索を行い講義に関する関心を持たせる
- 検索の知識
 - － 検索の技術的な仕組み（クイズ形式）
 - * クロール、インデックスの理解
 - * インターネット検索では表示されない情報について
 - － 便利な検索方法
 - * マイナス検索「-」
 - ・ 名前の検索においては同姓同名を除外する際に主に使用する
 - * フレーズ検索「"”」
 - ・ 名前の検索においては、検索結果で名字と名前が分離した形の検索結果が多い場合に利用。例えば「山田太郎」で検索したところ、「山田太郎」さんではなく「山田一郎」さんと「田中太郎」さんが表示されているページが表示される場合に使用する
 - * サイト内の検索「site:」
 - ・ Twitter など、特定のサービスの内容に絞った検索をする場合、または特定のサービスを除外して検索したい場合に使用する。例えば Twitter の投稿ばかり引っかかる場合、Twitter 以外の投稿は見えにくく、それ以外の投稿が気づきにくいことがある。そうした場合に“-site:twitter.com”をキーワードに追加することで Twitter の検索結果を除外することができる
 - － 練習の時間

* 実際にこれらの検索テクニックを組み合わせて色々試してみる。

－ 削除したい情報を見つけた場合について

3.1.5 講義の評価

講義の評価については、講義終了直後と講義終了後1ヶ月後に、参加した生徒・学生から授業後の意識の変化などを確認するためにインターネットでアンケートを取った（品川女子学院は一部手書きにて集計）。

3.2. 品川女子学院での授業とその考察

3.2.1 講義内容

- 講義時間は90分
- 対象は24名の生徒（中学3年生15名、高校1年生4名、高校2年生5名、すべて女性）
- 品川女子学院は先進的なIT教育で知られている。そのため、ITリテラシーの高めな受講者と想定した。

3.2.2 講義の観察

- ソーシャル・メディアの利用状況は思ったより少なく、自分について何の情報も出てこない、という受講者が多かった。
- 便利な検索方法については、そんなに詳しい受講者はいなかった。
- インターネット検索の技術的な仕組みについては難易度高そうだった。

3.2.3 講義直後のアンケート結果の考察

- 授業の満足度 (4.29 / 5.00) や検索の理解 (3.88 / 5.00) については比較的高い満足度を得たものの、検索の仕組みなど講義の難易度は難しかった (2.29 / 5.00) という反応が講義後の調査から得られた。
- ほぼ全員が今後の投稿は慎重にしたい、という結果が得られた。その一方で、これまで慎重にしすぎていたため、もう少しオープンにしようと思う、という回答も得られた。

3.2.4 1か月後の調査結果の考察

本調査は Google Form を使って行われた。受講者 24 名のうち、22 名から回答が得られた。

- 81.8%が検索に関心を持ったと回答
- クロール、インデックスの理解を確認する設問に対しての正解率は 22.73%と低い結果となった。
- 「2-8 ソーシャル・メディアに投稿する際に公開範囲を意識していますか？」
22 名中 21 名が意識しているという高い結果になった。21 名のうち 4 名が講義により意識するようになったという回答を得た。つまり意識している割合が、講義によって 77.3%から 95.5%へ改善した。
- 「2-11 ソーシャル・メディアに投稿する際に自分の個人的な情報が含まれていないかどうか意識していますか？」
22 名中 17 名が意識しているという結果になった。17 名のうち 3 名が講義により意識するようになったという回答を得た。つまり意識している割合が、講義によって 63.6%から 77.3%へ改善した。
- 「2-12 自分が公開して欲しくないような自分に関する情報を、友人が掲載していた場合、どのように対応しますか？」
何もしない、と回答したのは 1/22 にとどまった。

3.2.5 特徴的なコメントなど

- Twitter など全てネットに流れてしまっていることにおどろいた。
- 自分の、全然知らない情報がのっけていて、すごいビックリした
- もう少しオープンになるかも？検索で一切出て来ず、あっちゃんと守られていたのかな、と（笑）。さしつかえない程度にもう少しいろいろやってみたいです。
- こんなにも便利な検索の仕方はしらなかった、というようなことがたくさんあって楽しかったです。

3.2.6 まとめ

品川女子学院の講義からは、次のような知見を得た。

- 検索スキルについては、ITリテラシーが高い品川女子学院の生徒でも使いこなしている生徒はほとんどいなかった
- 検索の技術的な仕組みについては難易度も高く、短時間で深く理解してもらうのは難しいことがわかった
- インターネット上で自分に関する情報があまり存在しなかった生徒も含めて、今後の投稿に関しては、公開範囲の意識が77.3%から95.5%へ、投稿に個人的な情報が含まれているかどうかの意識については63.6%から77.3%へ大きな改善が見られ、今後の情報の公開についても適正な内容になっていく傾向が見られた

3.3. 成蹊学園での授業とその考察

3.3.1 前回の講義からの改善内容

- 前回の資料の検索の仕組みなど少し難しすぎるという意見が多かったこと、実際の理解度が低いという印象が講義中もあったため、検索の仕組みについては目的に対して最低限にとどめた。
- インターネットの炎上のフローを追加し、その中で検索がどこでどのように使われているか、という説明を追加した。

3.3.2 講義内容

- 講義時間は 90 分
- 対象は 11 名の生徒（高校 1 年生 4 名（男性 2 名、女性 2 名）、高校 2 年生 7 名（男性 4 名、女性 3 名））を対象に実施。

3.3.3 講義の観察

- 全体的に反応が小さくその反応から理解度など、大きな感触は得られなかった。
- 講義中確認した検索オプションの利用については、マイナス検索をしたことがある人 1 名、フレーズ検索などそれ以外の検索オプションの利用は 0 名と極めて少なかった。

3.3.4 講義直後のアンケート結果の考察

- 授業の満足度（4.27 / 5.00）や検索の理解（4.55 / 5.00）については前回より高い満足度、理解度を得た。また、改善を試みた検索の仕組みなど講義の難易度は前回（2.29 / 5.00）に比べ（3.36 / 5.00）と改善が見られた。

- 実際に手を動かす時間が少なかったという声が多かった。
- 満足度や自分の情報に関わらず、今後の情報の投稿は慎重にしたい、という声を得られた。

3.3.5 1か月後の調査結果の考察

本調査は Google Form を使って行われた。受講者 11 名のうち、6 名から回答が得られた。

- 83.3%が検索に関心を持ったと回答
- クロール、インデックスの理解を確認する設問に対しての正解は0と低い結果となった。
- 「2-8 ソーシャル・メディアに投稿する際に公開範囲を意識していますか？」
6名中5名が意識しているという結果になった。5名のうち2名が講義により意識するようになったという回答を得た。つまり意識している割合が、講義によって50.0%から83.3%へ改善した。
- 「2-11 ソーシャル・メディアに投稿する際に自分の個人的な情報が含まれていないかどうか意識していますか？」
6名中5名が意識しているという結果になった。5名のうち1名が講義により意識するようになったという回答を得た。つまり意識している割合が、講義によって66.7%から83.3%へ改善した。
- 「2-12 自分が公開して欲しくないような自分に関する情報を、友人が掲載していた場合、どのように対応しますか？」
何もしない、と回答したのは0となった。

3.3.6 特徴的なコメントなど

- 何か問題が起きる前に、もう少し下の世代からこのような授業を受けさせるべきだと思った。

- もともと情報流通の怖さについてはよく考えていて慎重なほうだと思し、今回自分の名前やアカウントで検索しても害のありそうなものは出てこなかったもので、このままで大丈夫だと思うからです。
- ネットは便利であると同時に、とても怖いものなのだと感じました。危機感が今までそんなになかったので、講座を受けることができ、よい経験になりました。

3.3.7 まとめ

- 成蹊学園での講義は受講者が11名と少なかったものの、成蹊学園においても今後の投稿に関しては、公開範囲の意識が50.0%から83.3%へ、投稿に個人的な情報が含まれているかどうかの意識については66.7%から83.3%へ大きな改善が見られ、今後の情報の公開についても適正な内容になっていく傾向が見られた
- 検索の技術的な仕組みについては、品川女子学院の時に比べ大きく改善したが、引き続き難易度は高いという感想があったので、よりわかりやすい説明を心がける
- 1か月後のアンケートで「公開範囲を意識しない」「個人的な情報が含まれているか意識しない」と回答した受講者も、自由コメントでは「細心の注意を払うようにしたい」というコメントもあり、大きな問題はないといえる

3.4. 大学生（上智大学・慶應大学）を対象とした授業とその考察

3.4.1 前回の講義からの改善内容

- 前回の講義で内容的に大きな問題はなかったため、スライドについてはほぼ同じ内容。

- 前回は実際に手を動かす時間が少なかった、という感想が多かったため、練習の時間を多く取ることを心がけた。
- 仕組みについては基礎的な知識をわかりやすく説明することを心がけた。

3.4.2 講義内容

90分の講義を9名（慶応義塾大学2年生6名（男性2名、女性4名）、上智大学3年生2名（男女各1名）、2年生1名（男性）の計3名）を対象に実施

3.4.3 講義の観察

- 中学生・高校生に比べてインターネットですでに公開されている情報は多かった。
- 7月のグループ・インタビューでも見られたが、大学受験の合格体験記が見られた。
- スポーツ大会の記録も多かった。

3.4.4 講義直後のアンケート結果の考察

- 授業の満足度（4.89 / 5.00）や検索の理解（5.00 / 5.00）については、これまでで一番高い満足度、理解度を得た。また、講義の難易度も（3.78 / 5.00）とこれまでで一番高い結果となった。

3.4.5 特徴的なコメントなど

- 名前検索など自分に関わりのある内容だったので、自分ごと化して楽しく学ぶことができました。

- 授業では習わなかった検索方法ばかりでとても参考になった。
- 実際に自分の情報を探すことでネットの怖さを実感できたので、講座を受講してよかったです。
- 予想外な写真やページを発見して驚きました。
- 投稿は特に変わらないが、他人の投稿に関してのモラルのなさが気になるようになった

3.4.6 1か月後の調査結果の考察

本調査は Google Form を使って行われた。受講者 9 名のうち、7 名から回答が得られた。

- 100%が検索に関心を持ったと回答
- クロール、インデックスの理解を試す設問に対しての正解率は 42.9%とこれまでの講義と比較して高い結果となった。
- 「2-8 ソーシャル・メディアに投稿する際に公開範囲を意識していますか？」
7名中7名が意識しているという結果になった。本講義により意識するようになったという回答はなかった。つまり、もともと意識していた率が100%であった。
- 「2-11 ソーシャル・メディアに投稿する際に自分の個人的な情報が含まれていないかどうか意識していますか？」
7名中6名が意識しているという結果になった。6名のうち1名が講義により意識するようになったという回答を得た。つまり意識している割合が、講義によって71.4%から85.7%へ改善した。
- 「2-12 自分が公開して欲しくないような自分に関する情報を、友人が掲載していた場合、どのように対応しますか？」
何もしない、削除するよう依頼しないと回答したのは4名と非常に多い結果となった。

3.4.7 まとめ

- 今後の投稿に関しては、公開範囲の意識はもともと100%であった。投稿に個人的な情報が含まれているかどうかの意識については71.4%から85.7%へ大きな改善が見られ、本講義においても今後の情報の公開についても適正な内容になっていく傾向が見られた
- 「2-12 自分が公開して欲しくないような自分に関する情報を、友人が掲載していた場合、どのように対応しますか？」に対して削除するよう依頼しないと回答した割合が前2回に比べて多かった。

3.5. 評価

3.5.1 インターネットへの情報公開の意識の変化について

本講義の目的は、自分自身についてのインターネット上の情報を検索するスキルをワーク・ショップ形式で身につけることで、「インターネット上の自分の公開情報について把握する」だけでなく、「今後の情報の投稿の際には公開範囲や投稿内容を意識し、公開範囲に応じた内容を投稿するようになる」といった、公開情報に対するリテラシーを向上することを目的としていた。全3回の講義のアンケートから、この目的の達成度について評価を行う。

3.5.2 評価方法

次項で定義する評価項目について、全3回の受講生の回答を統合して分析した。

3.5.3 評価項目

- 「2-8 ソーシャル・メディアに投稿する際に公開範囲を意識していますか？」
 - － 選択肢は「している」「するようになった」「しないようになった」「していない」「わからない」

- 「するようになった」の回答数によって本講義の効果を測定する
- 「2-11 ソーシャル・メディアに投稿する際に自分の個人的な情報が含まれていないかどうか意識していますか？」
 - 選択肢は「している」「するようになった」「しないようになった」「していない」「わからない」
 - 「するようになった」の回答数によって本講義の効果を測定する

3.5.4 評価

- 「2-8 ソーシャル・メディアに投稿する際に公開範囲を意識していますか？」
 - 本項目については、講義前と後で公開範囲を意識している率は76.3%から94.7%へ改善した。
- 「2-11 ソーシャル・メディアに投稿する際に自分の個人的な情報が含まれていないかどうか意識していますか？」
 - 本項目については、講義前と後で自分の個人的な情報が含まれているかどうか意識している率は60.5%から81.6%へ改善した。

このように、それぞれ約18%と約21%の改善が見られ、94.7%と81.6%に改善したことで、本講義を受講することで「インターネット上の自分の公開情報について把握する」だけでなく、「今後の情報の投稿の際には公開範囲や投稿内容を意識し、公開範囲に応じた内容を投稿するようになる」という傾向を確認することができた。

第4章

インターネット検索と情報モラル等 についての調査

4.1. サーベイおよび回答者について

講義案の作成にあたり、検索リテラシー（インターネット検索のスキルや仕組みの理解度）や情報モラルのリテラシー（ソーシャル・メディアの取り組み方など）についてサーベイを行った。サーベイは、2013年に参加した、内閣府主催の「青少年のインターネット利用環境づくりフォーラム」で知り合った情報モラル教育関係者を中心に依頼し、集計はインターネットでGoogle Formを使って行った。設問については付録A「検索リテラシーと情報モラルについてのアンケート」に掲載した。

調査項目

- 検索リテラシーについての質問
- ソーシャル・メディアなどへの投稿状況についての質問
- 情報教育の受講経験についての質問

調査概要

- 回答数：108人（男性30名、女性77名、不明1名）
- 集計期間：2014/11/30 - 2014/12/13 2週間

- 平均年齢：20.81 歳
- 第 3 章の講義の非受講者
- 回答は匿名。ただし、学校名の記入を求めた。

4.2. 全体的な傾向

4.2.1 主な利用する検索エンジン（複数回答可）

主に利用する検索エンジンについて（複数回答可）の回答を図 4.1 に示す。検索エンジンの利用傾向としては Google がトップで 57.5%、次に Yahoo で 28.3 %。検索サイトとして Twitter を利用するという声も第 3 位として 4.4 %見られた。

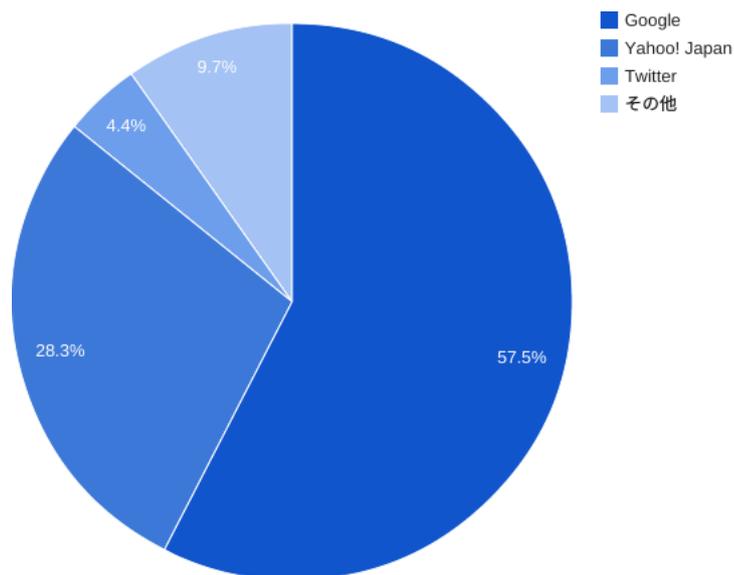


図 4.1: 主に利用する検索エンジン

4.2.2 検索オプションの利用状況について

検索スキルについての回答を図 4.2 に示す。検索スキルについては、28%が検索を使いこなしている、またはなんらかの検索オプションを使っている、という回答を得た。

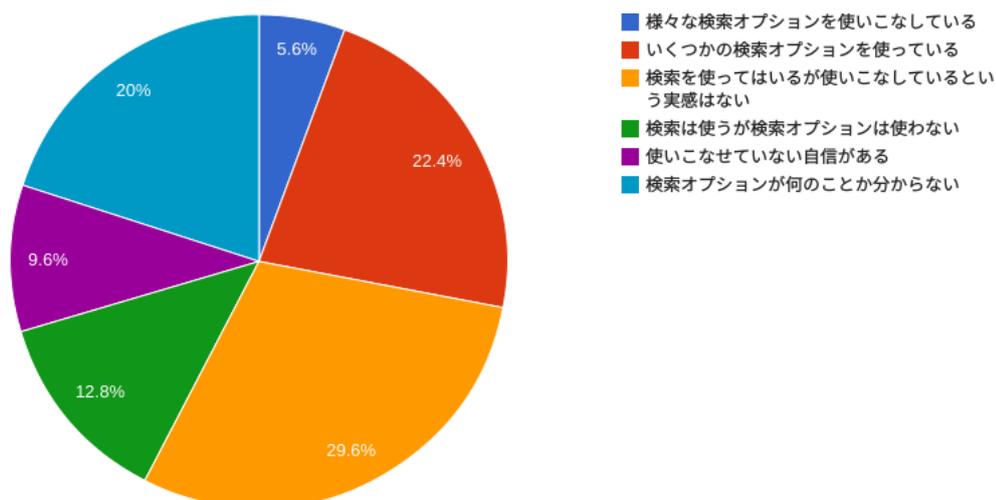


図 4.2: 検索オプションの利用状況

4.2.3 検索スキルと検索の仕組みの理解度（正解率）

検索スキルを確認する設問 5 問と、検索の仕組みの理解についての設問 2 問の正解者の割合を表 4.1 および図 4.3 に示す。検索スキルを確認する設問では、キーワードを適切に追加できた割合が 60.19% と一番高く、次にマイナス検索の 17.59%、あとは 10% 以下の正解率にとどまった。

検索の仕組みについては、「インターネット検索では見つけれないもの」という自由記述の設問に対し、検索エンジンの仕組みの理解をしていると感じられる回答はわずかに 1 件であった。回答例としては、「クローラーがまだ見つけれられていない情報」や、「インデックスに登録されていない情報」といった複数の正解

が考えられ、多くの正解を期待していたが、正解と認定できるものは1つだけであった。

最後の検索の仕組みは実質3つの選択肢の中から正解を選ぶものであったが、正解率14.81%と他の問題と比較すると比較的多かったものの、選択式の問題であることを考えると正解率は低い結果となった。

表 4.1: 検索スキルと検索の仕組みの理解度（正解率）

検索スキルと検索の仕組みの理解度	正解率
キーワードの追加	60.19%
フレーズ検索	4.63%
マイナス検索	17.59%
サイト内の検索	6.48%
マイナスのサイト内の検索	2.78%
インターネット検索では見つからないと思うもの（自由記述）	0.93%
検索の仕組み	14.81%

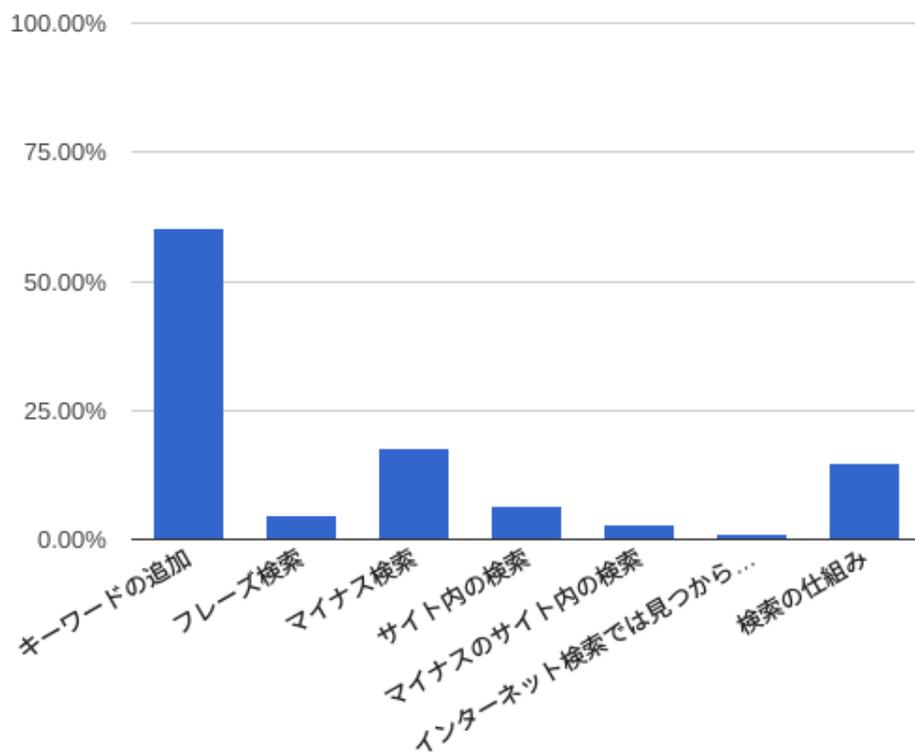


図 4.3: 検索スキルと検索の仕組みの理解度 (正解率)

4.2.4 自分に関する情報検索の頻度

自分に関する情報検索についての経験の有無、頻度についての回答を図 4.4 に示す。自分に関する情報検索については、「普段から行っている」と「時々行っている」の合計は 48.2%、「ほとんど行ったことがない」「行ったことがない」の合計は 51.8% となり、経験があるグループとほとんどないグループでほぼ半数ずつとなった。過去一回でも検索したことがある人で見ると 88% と多くの方が自分の名前を検索した経験があることがわかった。

また、自分に関する情報検索の結果、削除したいと思われる結果を見つけたことがある人は 22 人、そのうち 5 人はどうしていいかわからなくて困っているという結果を得た。

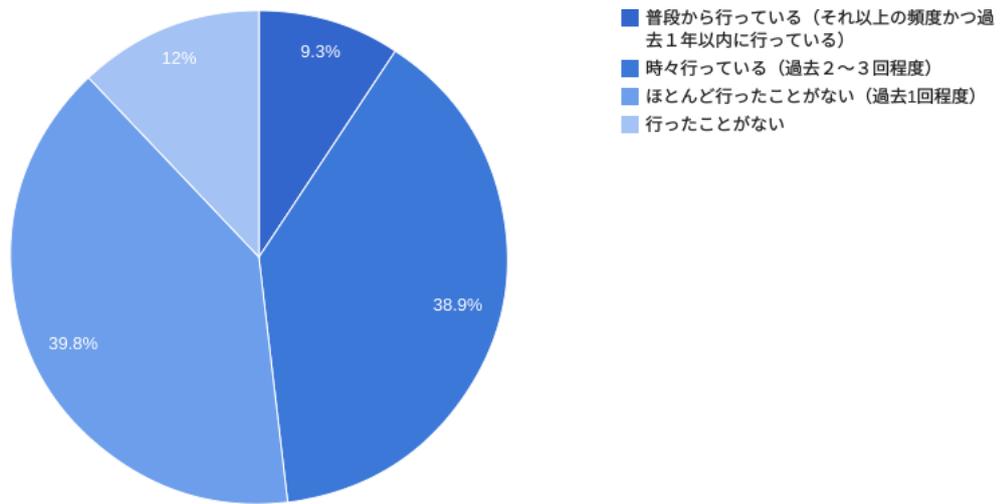


図 4.4: 自分に関する情報検索の頻度

4.2.5 最もよく利用するソーシャル・メディア

最もよく利用するソーシャル・メディアについての回答を図 4.5 に示す。設問では Facebook、Google+、LINE、mixi、Twitter を選択肢として設定し、その他で自由記述できるようにした。結果として LINE と Twitter が非常に高く Facebook までの 3 つのソーシャル・メディアが目立った。

LINE 45

Twitter 40

Facebook 16

Instagram 1

ブログ 1

ニコニコ動画 1

したことがない 4

LINE が 45、Twitter が 40 という結果になった。Facebook については大きく離れて 16 となった。

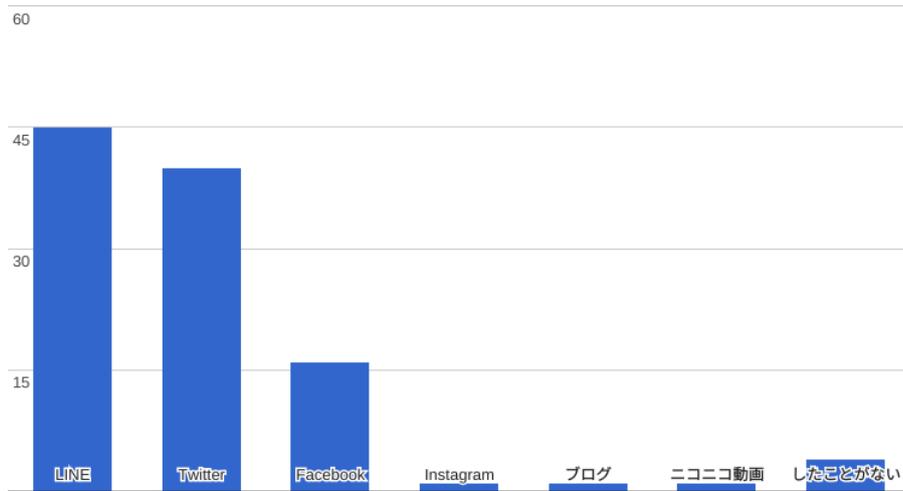


図 4.5: 最もよく利用するソーシャル・メディア

4.2.6 主なソーシャル・メディアの利用頻度

主なソーシャル・メディアの利用頻度の回答を図 4.6 に示す。左から Facebook、Google+、LINE、mixi、Twitter。毎日使う、という回答ではLINEが突出して高く、毎日とほぼ毎日という回答を合わせると、LINEとTwitterが目立った。Facebookは「最もよく利用するソーシャル・メディア」の設問でも3位に入ったが、一方で使ったことがない、も目立った。

表 4.2: 主なソーシャル・メディアの利用頻度

	毎日	ほ ぼ 毎日	週 に 1 回 程度	月 に 1 回 程度	ほとんど使 わない	使ったこと はあるが今 は使わない	使ったこと がない
Facebook	19	15	9	7	8	11	39
Google+	5	12	7	7	24	13	40
LINE	72	21	6	1	0	1	6
mixi	0	1	0	2	9	40	56
Twitter	44	27	7	4	5	8	13

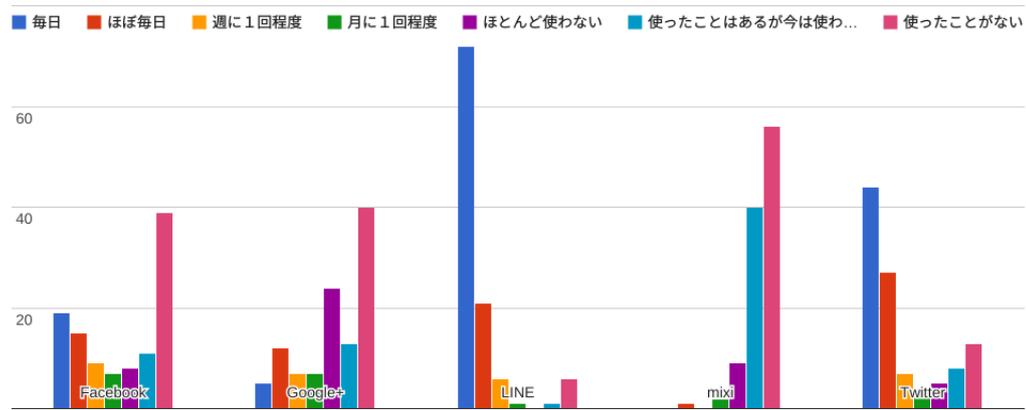


図 4.6: 主なソーシャル・メディアの利用頻度

4.2.7 情報投稿時の公開範囲の意識

インターネットに情報を投稿する際に公開範囲について意識しているかどうかの回答を図 4.7 に示す。情報投稿時の公開範囲の意識については、86.1%がある程度しているという回答が得られたものの、していない、わからない、ほとんどしていないという回答も約 14%見られた。

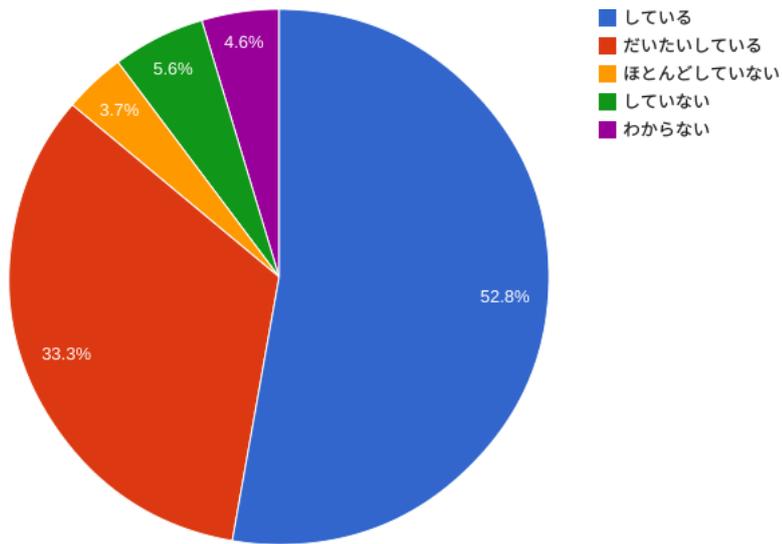


図 4.7: 情報投稿時の公開範囲の意識

4.2.8 問題投稿の経験の有無

過去に問題となる投稿をしたことがあるかどうかについての回答を図 4.8 に示す。問題投稿の経験の有無については、1.85%、2名から「したことがある」との回答を得た。しかし投稿内容については未記入であった。

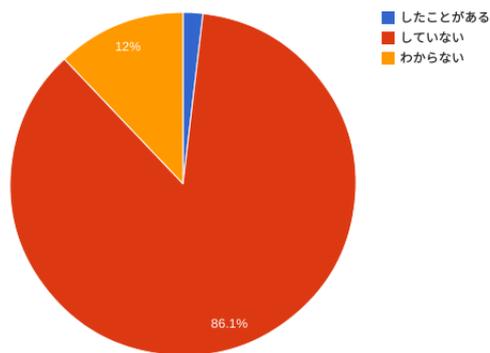


図 4.8: 問題投稿の経験の有無

4.2.9 平常時でない状態での投稿の有無

お酒を飲んだ後や落ち込んでいる時、感情が高ぶっている時などにした投稿についての回答を図 4.9 に示す。あとで読み返してびっくりしたことがあるが 6%、投稿を消したことがある 24%見られた。

あとで読み返してびっくりしたことがある 6
投稿を消したことがある 24
そういった投稿はしていない 68
そういった投稿をしたかどうかわからない 2

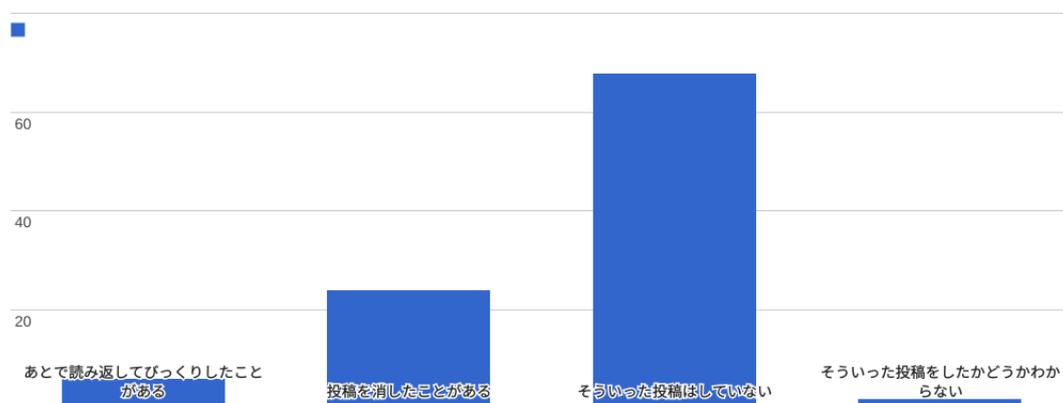


図 4.9: 平常時でない状態での投稿の有無

4.2.10 個人的な情報に対する意識

ソーシャル・メディアなどに情報を投稿する際に自分の個人的な情報が含まれているかどうかを意識するかどうかについての回答を図 4.10 に示す。約 80 %が意識していると回答したが、約 20 %はほとんどしていないことがわかった。

している 50

だいたいしている 37
ほとんどしていない 16
していない 2
わからない 3

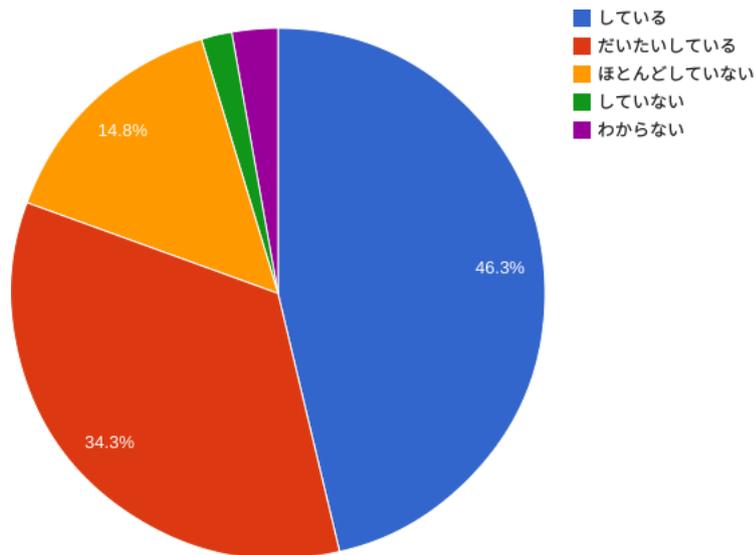


図 4.10: 個人的な情報に対する意識

4.2.11 友人の不適切な投稿への対応

自分が公開して欲しくないような自分に関する情報を、友人が掲載していた場合、どのように対応するかについての回答を図 4.11 に示す。85.6%が削除・修正してもらおうよう伝えると回答した一方で、14.3%が何もしないと回答した。

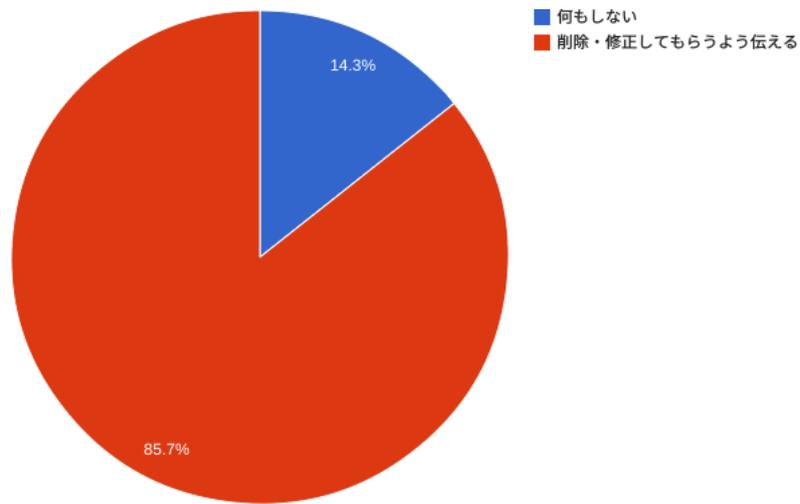


図 4.11: 友人の不適切な投稿への対応

4.2.12 情報教育の受講経験

情報教育の有無についての回答を図 4.12 に示す。92.5%が教科「情報」のよよ
うな授業を受講している。

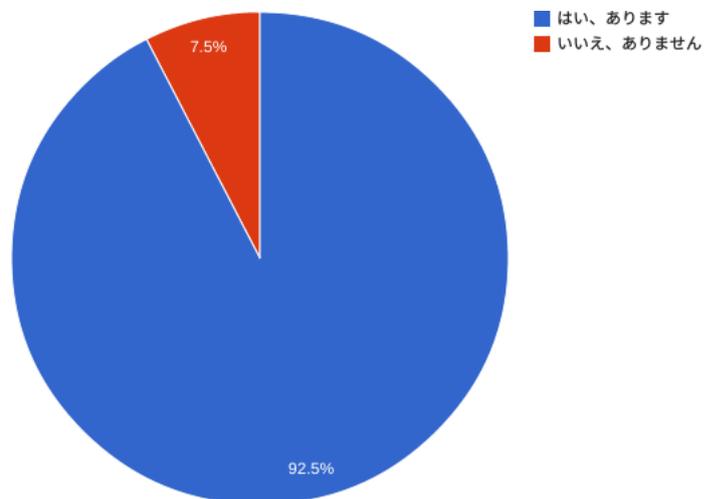


図 4.12: 情報教育の受講経験

4.2.13 情報モラル教育の有用性

情報モラル教育の有用性についての回答を図 4.13 に示す。情報モラル教育は 73.42 % が役立ったと感じている。あまり役立っていないと感じているのは約 10 % にとどまった。

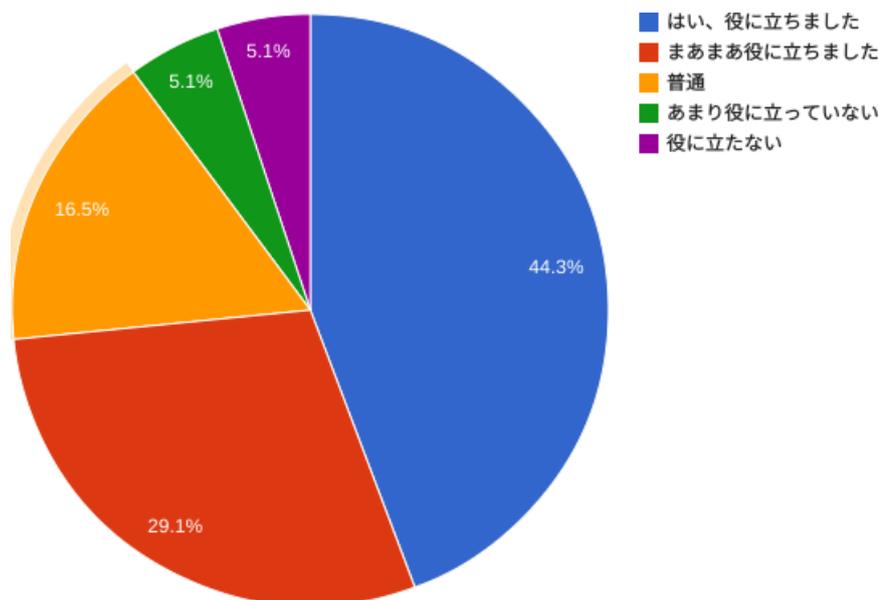


図 4.13: 情報モラル教育の有用性

4.3. 検索スキルの高低による分析

4.3.1 分析方法

次に、本サーベイの結果を検索スキルの高いグループと低いグループに分け、検索スキルの高低で情報モラルやソーシャル・メディアの取り組み方に何らかの傾向が見られないか分析した。検索スキルについては、4.2.3 で紹介した検索スキルの理解度に関する設問への回答に基づいて判断した。問題は全 5 問、各項目 1 点、0.5 点、0 点の 3 段階で計算した。検索スキルの高いグループと低いグループのグループ分けは、全体的に正解率が低かったため 2 点以上正解した者のうち、

4.2.2 の設問にて「検索オプションが何のことかわからない」という者を除外したグループを検索スキルの高いグループ (以下グループ A とする)、それ以外の者を検索スキルの低いグループ (以下グループ B とする) に分け、本サーベイ結果を分析する。なお、検索スキルの設問への正解率が低かったため、グループ A は 18 名、グループ B が 90 名となった。

4.3.2 平均年齢と検索を始めた年齢 (検索スキル別)

検索スキルの高低で平均年齢と検索を始めた年齢の比較を表 4.3 に示す。検索スキルが高いグループは 21.8 歳、検索スキルの低いグループは 20.6 歳であった。検索スキルの高い方が約 1.2 歳年上という結果になった一方で、インターネット検索を始めた時期は 9.9 歳と 12.3 歳となり、検索スキルの高いグループの方が約 2.4 歳も早くインターネット検索を使用していたことがわかった。

表 4.3: 平均年齢と検索を始めた年齢 (検索スキル別)

	検索スキル高	検索スキル低
平均年齢	21.8 歳	20.6 歳
検索を始めた年齢	9.9 歳	12.3 歳

4.3.3 実名での投稿経験率

実名での投稿の経験率を表 4.4 に示す。検索スキルの高いグループの方が実名での投稿経験率は低いものの、その差はわずかに 2%程度であり、大きな違いは見られなかった。

表 4.4: 実名での投稿経験率

	検索スキル高	検索スキル低
実名投稿経験率	85.6%	83.3%

4.3.4 学校名表示率

ソーシャル・メディアのプロフィールでの学校名を記載している割合の比較を表 4.5 に示す。ここでは大きな違いが見られた。検索スキルが高いグループの方が約 24% 掲載している率が高いことがわかった。検索スキルが高いことで学校名などの情報を表示する率が上がる傾向が確認できた。

表 4.5: 学校名表示率

	検索スキル高	検索スキル低
学校名表示率	77.8%	53.3%

4.3.5 匿名アカウントなどのアカウント名使い回し率

ソーシャル・メディアを匿名アカウントの状態で利用している場合の匿名アカウントのアカウント名や ID を使っている率の比較を表 4.6 に示す。ここでは検索スキルの高い方が約 15% 近く高く使いまわしている状況が見られた。ただし、4.3.9 でまとめているとおり、「匿名アカウントを使い回しているかわからない」という設問に対して検索スキルの低いグループが約 12% 多く「わからない」と回答しているため、その内容次第ではほとんど差が見られない可能性もある。

表 4.6: 匿名アカウントなどのアカウント名使い回し率

	検索スキル高	検索スキル低
使いまわしている	50.0%	35.6%

4.3.6 公開範囲意識率

ソーシャル・メディアへの投稿の際に公開範囲を意識しているかどうかの割合を表 4.7 に示す。検索スキルが高い方が 10% 高い結果になった。

表 4.7: 公開範囲意識率

	検索スキル高	検索スキル低
意識している	61.1%	51.1%

4.3.7 投稿内容意識率

ソーシャル・メディアなどへの投稿をする際に自分の個人的な情報が含まれているかどうかを意識するかどうかの割合の比較を表 4.8 に示す。この項目では 24.5% の大きな差が見られた。

表 4.8: 投稿内容意識率

	検索スキル高	検索スキル低
意識している	66.7%	42.2%

4.3.8 友人の不適切な投稿への対応

友人が自分にとって公開してほしくないような情報を公開した場合に削除・修正するよう依頼するかどうかについての比較を表 4.9 に示す。本項目では大きな差が見られなかった。

表 4.9: 友人の不適切な投稿への対応

	検索スキル高	検索スキル低
削除・修正を依頼する	85.6%	83.3%

4.3.9 「わからない」という回答率

「わからない」という回答があった設問について表 4.10 に示す。本サーベイについて調べるうちに、検索スキルの低い方が「わからない」という回答が多いこ

とに気づいた。匿名アカウントについて記憶に無い、という意味で使いまわしているか「わからない」という回答をするのは理解しやすいが、投稿の際に公開範囲や個人的な情報が含まれているかどうかを意識しているかどうか「わからない」というのは何も考えず投稿をしていることの現れであろうか。

表 4.10: 「わからない」という回答率

	検索スキル高	検索スキル低
匿名アカウントを使い回しているかわからない	5.6%	17.8%
投稿の際に公開範囲を意識しているかわからない	0%	5.6%
投稿の際に個人的な情報があるか意識してるかわからない	0%	3.3%

第5章

講義のための教材とシラバス

5.1. 講義のための資料とそのシラバス

第3章で述べた講義や第4章で述べたサーベイを通して得られた知見をもとに最終的な講義用の教材と補足事項、シラバスをまとめた。教材については付録B「インターネット検索で学ぶ情報モラル講座用教材」に掲載した。

なお本教材は、情報モラル教育、または検索スキルの講義のために自由に使用することを許可する。ただし、「5.6. 講義に必要な知識とその補足」の内容を理解していることが望ましい。

5.2. 講義概要

5.2.1 本講義の目的

本講義の目的は自分自身に関連する、インターネット上の公開情報のリスクに対するリテラシーを高めることである。具体的には次の項目の改善を期待している。

すでに公開されている情報の把握・管理

- 自分自身の公開情報の確認（学校名や実名の公開状況など）
- 自分自身について不適切な情報が公開されていないかどうか
- アカウント名の使い回し状況などの確認

今後インターネットへ公開する情報の適正化

- 今後のインターネットへの情報の公開の際には、公開範囲や投稿内容を意識し、公開範囲に応じた内容を投稿するようになる

5.2.2 対象

本講義は、パソコンやスマートフォン、タブレットなどでインターネットを日常的に利用している高校生から大学生を中心に、それ以上の世代を対象とする。小学生やまだインターネットでの投稿を行っていないものが大半を占めるような世代では有効性が下がるためそういった受講者向けに本講義を行うことは推奨しない。

5.2.3 講義の流れ

1. 講義の目的の説明

本講義は、検索のスキルを教えることで情報を探す技術が身につくだけでなく、公開情報のリスクに対するリテラシー、特に情報を公開するリテラシーの向上も目的としている。そこで、情報公開のリテラシー向上に検索スキルをあげることがどのように役立つかを最初に簡単に説明する。

2. まず検索してみよう

この項目の目的は、講義に引き込むことである。自分に関する情報については受講者の関心も高く、多くの受講者が自分自身の情報の検索は熱心に行う傾向があるため、講義に引き込むには非常に効果的である。しかし、検索スキルを教えていない段階ではすぐに飽きてしまうため、時間は短めに3分くらいを目安とする。

検索は名前だけで行う。インターネットではアルファベットで登録することも多いため、漢字とアルファベットでの検索の両方を試すことを推奨する。同姓同名が多い場合など自分に関する情報がほとんど出てこないこともあるが、「自分は特定されにくいんだ」といった状況を知ることも重要である。

3. 検索の仕組みの説明

技術的な仕組み

- クロール、インデックスについて
この項目を入れる意図としては、検索結果に情報が表示される仕組みを知ることによってインターネットへの情報公開を過度に恐れたり萎縮したりしないようにすること、実際に情報を削除する際の確認作業などでこの知識が必要となるためである。クイズ形式で質問し、少し時間を置いて考えさせる。
- インターネット検索では見つからないもの
少し時間を置いて考えさせる。回答は前の質問で説明したクロールとインデックスをベースとしたものを正解とする。クロールやインデックスの理解をしていない回答は基本的に不正解として扱う。

検索オプション

なるべく受講者の関心を引きそうなキーワードに例を置き換えて使用することを推奨する。

- マイナス検索
この例は、“apple”というキーワードによる検索結果から iPhone に関連するページを除外する例である。“apple”で検索すると Steve Jobs が作った Apple 社の情報が検索結果をうめつくすが、このマイナス検索を行うことで iPhone に関する情報を含むページを検索結果から外すことが出来るため、Apple 社以外にも様々な“apple”に関するウェブサイトが表示される。-iPhone だけでは全ての Apple 社の情報を除外することはできないが、仕組みの理解としては十分効果的な例である。自分に関する情報の検索においては、同姓同名の方を除外する際などに使用する。例えば、同姓同名の方の学校名など、特徴的なキーワードをマイナス検索する。
- フレーズ検索
この例の英文は、自分が使おうとしている英文が実際に使われている

かどうかを試した例である。普通に検索すると1億件以上の検索結果が表示されるが、フレーズ検索をすると極めて少ない結果（現在は1件）となる。つまり、この英文は少し何かが間違っている可能性が高いことが考えられる。

自分に関する情報の検索においては、検索結果で名字と名前が分離した形の検索結果が出てしまう場合などに使用する。例えば「山田太郎」で検索したところ、「山田太郎」さんは存在しない、「山田一郎」さんと「田中太郎」さんが表示されているページが検索結果に出てきてしまうような場合に使用する。

- サイト内の検索

ある特定のサイト内の検索は、サイト内検索がないサイトの検索などでも有効である。また、ドメイン名だけでなくサブドメインやサブディレクトリーといった単位でも絞り込むことができる。Twitter 以外でも受講者の関心の高そうなサイトを例にすることをお勧めする。

4. 検索してみよう

この時間は十分に長く取る。自由に検索をさせるとすぐに飽きてしまう生徒もいるので教師側から検索のお題を出すことを推奨する。

5. 不適切と思われる情報を見つけた場合

検索結果からこの自分に関する情報は削除したい、といった情報があった場合、かなり深刻なケースである場合もあるため、そうした場合の対処方法についても本講義で触れる。

基本的にはインターネット上のコンテンツは作った人しか消せないものである、ということをまず伝える。表現の自由など、憲法が保障している人権にも関わる問題でもあるため、そう簡単には消せないものであることを伝えることが予防的には重要。

また、情報を発見したのは検索エンジンであっても、検索結果に出ないことを目的とするのではなく、情報自体を消すことを強く推奨する。これは検索で表示されなくてもその情報自体がインターネットで残っている限り他の人

に見られる可能性があり、また、別の検索エンジンなどが流行した際にそちらでも対処する必要性が生じるためである。

5.3. シラバス

- 講義は90分1コマとする。
- 実際に検索をさせるため、コンピュータールームなど一人一台のパソコンがある環境を推奨する。しかし、スマートフォンやタブレットなどでも検索オプションは同様に動作するので、それに対応することも可能である。
- 本講義では、検索エンジンに Google 検索を利用しているが、他の検索エンジンでも同様のことは可能である。しかし、あまり普及していない検索エンジンを使用しても危機感が高まらないため、その時代において一般的な検索エンジンを使用して講義することを強く勧める。
- 検索の練習の時間を十分に割くこと。しかし、放っておくと脱線しやすいため様子を見て切り上げるなど時間を多く割きすぎないように注意する。

5.4. 名前の検索についての補足

名前の検索をする際に注意したい事項を列挙する。

- まず何の検索オプションも使用せず実名で検索させること。同姓同名がいることや、自分の名前で検索結果に関連する情報が出やすいのか、出にくいのか、などを知ることは非常に重要である。
- マイナス検索やフレーズ検索、サイト内の検索は情報を絞り込んでいく時に使用する。検索オプションは組み合わせても使用できる。また、複数回使用することも可能である。
- 同姓同名がいた場合は、同姓同名の特徴的なキーワードを使用してマイナス検索する。

- 自分の苗字と名前が分離してしまう場合にフレーズ検索を使用する。
- Twitter など、特定のサービスの内容に絞った検索をする場合は“site:”を、特定のサービスを除外して検索したい場合に“-site:”を使用する。例えば Twitter の投稿ばかり検索結果に表示される場合、Twitter 以外の投稿は見えにくく、それ以外の投稿が気づきにくいことがある。そうした場合に“-site:twitter.com”をキーワードに追加することで Twitter の検索結果を除外することができる。
- 実名を表示していないため実名では何もでてこない場合は、それで安心するのではなく、アカウント名や ID などで検索をさせ、アカウント名の使い回しの状況などを確認させること。匿名アカウントでも幾つかの情報を合わせると個人が特定できたり、使用しなくなったソーシャル・メディアなどに個人の特特定可能な情報が残っている場合もある。また、ニックネームと学校名などでも検索し、そうした情報で友人が投稿していないかも確認してみる。
- 学校名、企業名、サークル名、特徴的な趣味や活動などがあればその活動名などもキーワードも足して検索してみる。

5.5. 注意事項

- 講義の検索例に掲載する人物の選択は慎重に行うこと。講師自らの名前にする場合は検索結果に問題がないかどうか、事前に十分に確認をしておくこと。
- 本講義はあくまでも受講者自身の情報の検索として行うこと。親や兄弟、友人といった他人の名前を検索させることは様々なリスクが伴うため推奨しない。

5.6. 講義に必要な知識とその補足

本講義の実施にあたっては次の資料について目を通しておくことを強く勧める。

- 検索の仕組み（クローラ、インデックスについての知識） [2] [4]
- 検索結果の見方についての知識 [1]
- 検索オプションについての知識 [5]
- 検索結果に削除したい情報が出てきた場合の対応について [3]

第6章

結 論

6.1. まとめ

6.1.1 本研究の目的

本研究では、「自分自身に関するネット上の公開情報はインターネット上の新しいリスクとして情報モラルで取り扱うべき問題である」という認識に立ち、こうした新しい情報リスクへの対応に必要な要素を抽出するために、大学生へのインタビューを実施した。その結果、自分自身に関する情報の検索スキルを高めることで今後の情報公開についても慎重になる傾向が確認できた。そこで自分自身に関する情報の検索スキルを高めることによる情報モラルの教育方法を作成し、模擬授業によりその有用性を検証した。

6.1.2 検証結果

第3章では、高校生・大学生を対象に3回にわたって行った講義について述べ、受講者へのアンケートの結果、情報の公開範囲を意識するという割合は講義前と後でおよそ76%からおよそ94%へ向上し、自分の個人的な情報が含まれているかどうか意識している割合はおよそ60%からおよそ80%に向上した。これにより、自分自身の情報を検索するスキルを身につけることで、単に自分自身の公開情報を把握出来るだけでなく、今後のインターネット上の情報公開についても慎重に行うようになるなどの意識の変化が確認でき、自分自身に関するインターネット上の公開情報のリスクに対応できることがわかった。

6.1.3 サーベイの結果

第4章で示した検索スキルや情報モラルについて行った調査では、マイナス検索やフレーズ検索といった便利な検索方法があまり知られていないことや、自分自身の検索を経験している割合は85%を超えることといった全体的な傾向をまとめた。検索スキルの高低で2つにわけたグループの比較では、学校名や実名をソーシャル・メディアなどに公開しているかどうかという点については、実名の投稿経験率はほとんど変わらないのに対し、学校名の表示率は検索スキルが高いグループの方が約24%高いなど、検索スキルの高低による共通の特徴は見られないことがわかった。また、情報の公開時に公開範囲を意識しているか、また、投稿内容に個人的な内容が含まれるかどうかを意識しているか、といった質問では検索スキルが高いグループの方が意識しているという傾向は見られた。第5章では、本講義で使用した講義案をそのシラバスとともにまとめた。

6.2. 今後の課題

6.2.1 インターネット検索以外の個人の特定方法について

インターネット上の公開情報に類似するものとして、公開情報ではないがそのサービスに登録すれば誰でも見られるような情報がある。例えばmixiの全体に公開しているプロフィール情報などは、検索はされないがmixiに投稿すれば誰にも見れる情報である。そうした公開情報に類似する情報のリスクに対する教育については本研究ではカバーしきれていないが、実際に個人の特定に利用されているケースもあるため、この点についても今後研究が進む必要があると考えている。

6.2.2 インターネット検索の公開情報のポジティブな活用

インターネット上の公開情報をいかにコントロールしていくか、というインターネットに公開情報が増えてきたことによるポジティブな面についてはまだ十分な議論がなされていない。インターネット上の評判の操作という点では一歩間違え

ると逆に評判を落とす可能性もあるなど様々なリスクも考えられるため、こうした観点での研究が進むことを強く願う。

6.2.3 社会のより豊かな発展のために

インターネットの登場は、産業革命以来2世紀ぶりの社会構造を大きく変革するチャンスの到来である。この変革が人々の生活をより豊かにハッピーなものにするには、多くの人々がインターネットを積極的に活用していくことが不可欠であると考えている。多くの人々がインターネットの様々なリスクに臆することなく、そうしたリスクをきちんと回避してインターネットによって生活を豊かにハッピーにしていけるよう、今後も新しい情報モラルや情報リテラシーの問題への取り組みや教育に関わっていくつもりである。

謝 辞

本研究の指導教員であり、研究テーマの設定や方向性の確認など、重要なポイントにおいて的確なご指導をいただきました慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の中村伊知哉教授に心から感謝いたします。

本研究について方向性や内容の確認など、研究指導から論文執筆まで数多くの助言を賜りました慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の加藤朗教授に心から感謝いたします。入学して最初のプレナリーミーティングの際にも私の活動内容についてアドバイスをいただき、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

論文の方向性についての的確な助言を賜りました慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の稲見昌彦教授に心から感謝いたします。研究全体の論を見直す良いきっかけとなりました。ありがとうございました。

中間発表や公聴会の準備時など、数多くの的確な助言を賜りました慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の砂原秀樹教授に心から感謝いたします。

本研究について助言を賜りました慶應義塾大学大学院環境情報学部の植原啓介准教授に心から感謝いたします。急なお願いにもかかわらず快くお引き受けいただき、ありがとうございました。

本研究の最初の講義である品川女子学院での講義の開催やアンケートなど数多くのご協力をいただきました品川女子学院の酒井春名先生に心から感謝いたします。

大学時代からの古き友人であり、休職し海外留学中でありながら成蹊学園での講義の実現のためご協力いただきました成蹊学園の齋藤敬子先生に心より感謝いたします。

成蹊学園での講演、アンケートの実施など様々なご協力をいただきました成蹊学園の山戸眞子先生、小島健太郎先生に心から感謝いたします。

グループ・インタビューや講義開催、アンケートなど様々な場面でご協力いただきました上智大学と慶應義塾大学の若き友人たちに心から感謝いたします。

アンケートを広めるのにご協力をいただきました熊本市立総合ビジネス専門学校 教頭の桑崎剛先生、神奈川大学経済学部の講師 関下昌代さん、安心ネットづくり促進協議会 事務局長の石原友信さん、事務局の山崎陽平さんに心から感謝いたします。

論文執筆に際し、ヒアリングやデータの提供に快く応じていただいた株式会社デジタルアーツの工藤陽介さんにも心から感謝いたします。

ふと隣り合わせたランチタイムやディナータイムに研究の内容、論文の方向性などに耳を傾けていただき、アドバイスや数多くの示唆をいただいたグーグル株式会社の同僚たちに心から感謝いたします。

本研究科入学のきっかけとなる一言を与えて頂き、公聴会の際にも温かく見守っていただきました、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の古川享教授に心から感謝いたします。

最後に、社会人大学院生としての活動を支えていただいた家族に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

参 考 文 献

- [1] Google. Google 検索の結果ページ. <https://support.google.com/websearch/answer/35891?hl=ja>, 2013.
- [2] Google. 検索の仕組み「クロールとインデックス」. <http://www.google.co.jp/intl/ja/insidesearch/howsearchworks/crawling-indexing.html>, 2013.
- [3] Google. Google からの情報の削除. <https://support.google.com/websearch/troubleshooter/3111061?hl=ja>, 2014.
- [4] Google. Google 検索の仕組み. <https://support.google.com/webmasters/answer/70897?hl=ja>, 2014.
- [5] Google. 検索での句読点、記号、演算子. <https://support.google.com/websearch/answer/2466433?rd=1>, 2014.
- [6] 工藤陽介. 若者にとってネットは“ スマホ + アプリ ”、モラル教育追い付かず炎上の構造. http://internet.watch.impress.co.jp/docs/news/20130910_614882.html, 2013.

付 録

A. 検索リテラシーと情報モラルについてのアンケート

「検索リテラシーと情報モラルについてのアンケート」

はじめまして。慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 修士2年の金谷武明と申します。現在大学院で情報モラルについての研究を行っています。研究の参考にしたいと思しますので、こちらのアンケートへのご協力よろしく申し上げます。

このアンケートの結果は、あなたが誰かわからないようにして管理されます。2016年3月まで保管され、その後はデータが読めないように廃棄します。また、個人が特定されない形で論文等に掲載される場合がありますのでご了承ください。

慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 修士2年 金谷 武明

*必須

・学校名を教えてください。

学生でない方は空欄にしておいてください

(自由記述)

・年齢を教えてください *

(自由記述)

・外国からの留学生ですか? *

- ・はい
- ・いいえ

・性別を教えてください *

(自由記述)

1. 検索についてお伺いします。

1-1 インターネット検索を始めた年齢を教えてください。半角数字2桁でご記入ください。 *

小学生（6歳-12歳）、中学生（12歳-15歳）、高校生（15歳-18歳）
（自由記述）

1-2 その時に利用したデバイス（端末）について教えてください *

- ・家族のデスクトップパソコン
- ・家族のノートパソコン
- ・自分のデスクトップパソコン
- ・自分のノートパソコン
- ・フィーチャーフォン
- ・スマートフォン
- ・携帯用ゲーム機（ニンテンドー 3DS, PSP など）
- ・その他:

1-3 上記質問について、その目的について教えてください。検索を利用していた場合、どのような情報を探していましたか？ *

上記質問で複数の回答を選んだ場合、端末によって違いがありましたらそれをご記入ください
（自由記述）

1-4 現在インターネット検索などを使って情報を探す際に最もよく利用するサイトを教えてください *

（自由記述）

1-5 インターネット検索は普段どの程度利用していますか？ *

- ・利用しない
- ・利用したことはある
- ・週 1 回程度
- ・週 2 , 3 回程度
- ・ほぼ毎日
- ・毎日

1-6 検索オプション（便利な検索方法）の活用度など、インターネット検索スキルについてお伺いします。検索スキルについて、ご自身でどのように感じていますか？（複数選択可） *

- ・様々な検索オプションを使いこなしている
- ・いくつかの検索オプションを使っている
- ・検索は使うが検索オプションは使わない
- ・検索を使ってはいるが使いこなしているという実感はない
- ・使いこなせていない自信がある
- ・検索オプションが何のことか分からない

いくつかの検索のケースについてどのように検索するかお伺いします。キーワード等の文字列を

記述してください。検索にはインターネット検索を使い、乗換案内等の検索意外のアプリなどは使わないこととします。検索スキルの確認のための例題ですので、実際の検索結果とは異なる場合があります。わからないものについては「わからない」と答えて次に進んでください。

(自由記述)

1-7 東京駅の山手線の時刻表をインターネット検索を利用して調べようと思います。さて、どのように検索しますか？ * *

(自由記述)

1-8 英文を書こうとして「I wonder if I can try」という文章が実際に使われている英語かどうかを確認するためには、どのように検索しますか？ *

(自由記述)

1-9 キーワード「東京駅」の検索結果から、丸ノ内線に関する情報を除外したい場合はどのように検索しますか？ *

(自由記述)

1-10 インターネット検索を使って、example.com (架空のサイト)のサイト内で東京駅のイベント情報を調べたいと思います。どのように検索しますか？ *

(自由記述)

1-11 (上記質問の続きです)上で調べた example.com (架空のサイト)以外の東京駅のイベント情報をインターネット検索で調べるにはどのように検索しますか？ *

(自由記述)

1-12 インターネット検索では見つからない情報にはどのようなものがあると思いますか？ *

(自由記述)

1-13 検索の仕組みについてお伺いします。一般的なインターネット検索の仕組みとして正しいものはどれだと思いますか？ * (複数選択可)

- ・ 検索ユーザーが検索したキーワードでインデックスは作られていく
- ・ 検索ユーザーが検索した瞬間に主要なサーバーの情報を探しに行く
- ・ 検索結果は、事前に集めた情報を利用して表示している
- ・ インデックス、クローラーが何のことか分からない

1-14 自分に関連する情報を検索してみたことがありますか？検索したものにチェックを入れてください * (複数選択可) その他の欄記入例：名前とサークル名、あだ名とサークル名、自分の名前と友達の名前

- ・ 名前
- ・ ハンドルネーム

- ・名前と学校名
- ・ハンドルネームと学校名
- ・検索したことがない
- ・その他:

1-15 上記の自分に関連する検索結果で、削除したい、これは表示させておいていいのかな、と気になった検索結果を見かけたことがありますか？ *

- ・はい
- ・いいえ

1-16 上記質問で気になる検索結果があった方にお伺いします。それはどのような結果ですか？
(自由記述)

1-17 上記質問で気になる検索結果があった方にお伺いします。その結果に対して情報を削除するなどの対応をすでに行いましたか？

- ・はい、すでに対応して今は問題ありません
- ・はい、すでに対応してもうすぐ修正される予定です
- ・はい(上記以外の状態)
- ・いいえ、でも大きな問題ではないので放置しています
- ・いいえ、どうしていいかわからなくて困っています
- ・いいえ(上記以外の状態)
- ・わからない
- ・その他:

1-18 こうした自分に関する情報の確認についてお伺いします *

- ・普段から行っている(それ以上の頻度かつ過去1年以内に行っている)
- ・時々行っている(過去2~3回程度)
- ・ほとんど行ったことがない(過去1回程度)
- ・行ったことがない

1-19 検索について、こういうことが簡単に検索できると便利だと思うものはありますか？
(自由記述)

2. ソーシャル・メディア等の投稿についてお伺いします。

2-1 次のサービスの中で、情報の投稿にもっともよく利用するものを教えてください *

- ・Facebook
- ・Google+
- ・LINE
- ・mixi
- ・Twitter

- ・したことがない
- ・その他:

2-2 次のサービスの利用頻度を教えてください *

Facebook

- ・使ったことがない
- ・使ったことはあるが今は使わない
- ・ほとんど使わない
- ・月に1回程度
- ・週に1回程度
- ・ほぼ毎日
- ・毎日

Google+

- ・使ったことがない
- ・使ったことはあるが今は使わない
- ・ほとんど使わない
- ・月に1回程度
- ・週に1回程度
- ・ほぼ毎日
- ・毎日

LINE

- ・使ったことがない
- ・使ったことはあるが今は使わない
- ・ほとんど使わない
- ・月に1回程度
- ・週に1回程度
- ・ほぼ毎日
- ・毎日

mixi

- ・使ったことがない
- ・使ったことはあるが今は使わない
- ・ほとんど使わない
- ・月に1回程度
- ・週に1回程度
- ・ほぼ毎日
- ・毎日

Twitter

- ・使ったことがない
- ・使ったことはあるが今は使わない
- ・ほとんど使わない
- ・月に1回程度
- ・週に1回程度
- ・ほぼ毎日
- ・毎日

2-3 実名で投稿しているサービスを教えてください* (複数選択可)

- ・Facebook
- ・Google+
- ・LINE
- ・mixi
- ・Twitter
- ・したことがない
- ・その他:

2-4 プロフィールに学校名を表示しているサービスを教えてください* (複数選択可)

- ・Facebook
- ・Google+
- ・LINE
- ・mixi
- ・Twitter
- ・したことがない
- ・その他:

2-5 匿名で投稿しているサービスを教えてください* (複数選択可)

- ・Facebook
- ・Google+
- ・LINE
- ・mixi
- ・Twitter
- ・したことがない
- ・その他:

2-6 匿名アカウントのハンドル名やニックネームを複数のサービスで使いまわしていますか? *

- ・はい
- ・いいえ
- ・わからない

- ・その他:

2-7 匿名アカウントをお持ちの方にお伺いします。匿名アカウントを持っている理由は何ですか？

- ・実名では言えないことを投稿したいから
- ・プライバシーを守りたいので匿名にしている
- ・複数の匿名アカウントを持ち、それぞれ人格などを使い分けている
- ・その他:

2-8 ソーシャル・メディア等に投稿する際に公開範囲を意識していますか？ *

- ・している
- ・だいたいしている
- ・ほとんどしていない
- ・していない
- ・わからない

2-9 ソーシャル・メディア等に投稿する際に社会的に問題とされるような内容を投稿したことがありますか？ *

- ・したことがある
- ・していない
- ・わからない

2-10 上記質問でしたことがある方にお伺いします。それはどんな投稿でしたか？ 差支えのない範囲でご記入ください。

(自由記述)

2-11 お酒を飲んだ後や落ち込んでいる時、感情が高ぶっている時などにした投稿についてお伺いします * (複数選択可)

- ・あとで読み返してびっくりしたことがある
- ・投稿を消したことがある
- ・そういった投稿はしていない
- ・そういった投稿をしたかどうかわからない
- ・その他:

2-12 上記質問でしたことがある方にお伺いします。それはどんな投稿でしたか？ 差支えのない範囲でご記入ください。

(自由記述)

2-13 ソーシャル・メディア等に投稿する際に自分の個人的な情報が含まれていないかどうか意識していますか？ *

- ・している

- ・だいたいしている
- ・ほとんどしていない
- ・していない
- ・わからない

2-14 自分が公開して欲しくないような自分に関する情報を、友人が掲載していた場合、どのように対応しますか？ *（複数選択可）

- ・何もしない
- ・削除・修正してもらうよう伝える
- ・その他:

2-15 上記質問で「何もしない」を選択した方にお伺いします。その理由を教えてください。

3. 情報の授業についてお伺いします

3-1 高校などの教科「情報」など、情報の授業を受けたことはありますか？

- ・はい、あります
- ・わかりません
- ・いいえ、ありません
- ・その他:

3-2 その際に、インターネット上でのマナーやモラルについての、情報モラルについての授業はありましたか？

- ・はい、ありました
- ・わからない
- ・いいえ、ありませんでした

3-3 情報モラルの授業を受けた方にお伺いします。その授業はいつありましたか？

- ・小学校
- ・中学校
- ・高校
- ・大学
- ・その他:

3-4 情報モラルの授業を受けた方にお伺いします。情報モラルの授業は役に立つ内容と感じましたか？

- ・はい、役に立ちました
- ・まあまあ役に立ちました
- ・普通
- ・あまり役に立っていない
- ・役に立たない

・その他:

3-5 上記質問で、そのように感じる理由を教えてください
(自由記述)

B. インターネット検索で学ぶ情報モラル講座用教材

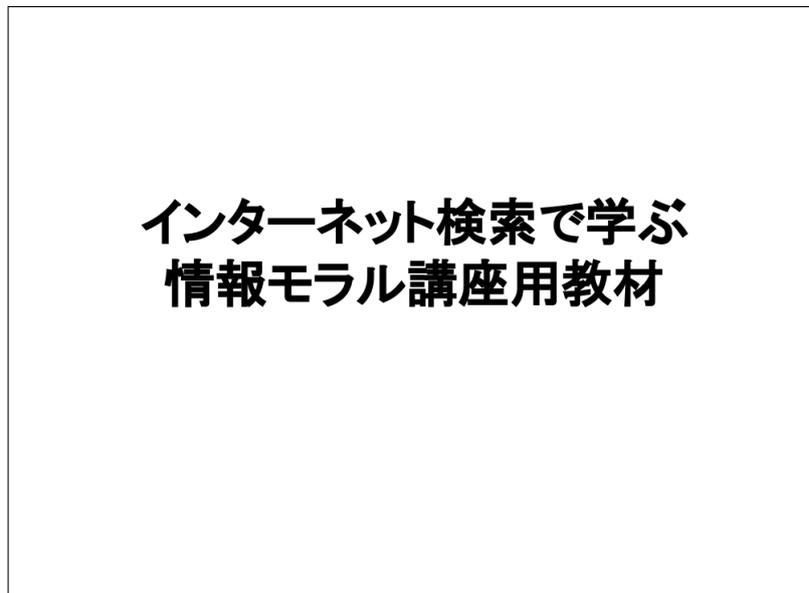


図 6.1: 情報モラル講座用教材 1

講義の流れ

- 検索スキルと情報モラル
- 検索してみよう！
- インターネット検索の基本
 - 検索の仕組み
 - 便利な検索方法
- 便利な検索方法を使って検索してみよう！
- 気がかりな情報を見つけた時

図 6.2: 情報モラル講座用教材 2

検索スキルと情報モラル

インターネットの炎上



個人が特定され、
退学や内定取り消しになる事態も

図 6.3: 情報モラル講座用教材 3

安心して情報発信するために、
検索をマスターしよう！

図 6.4: 情報モラル講座用教材 4

炎上が起きると・・・

- 炎上発生
- 個人情報の特定
- 情報の拡散
- 学校や内定先に連絡
- 退学停学処分や内定取消し

図 6.5: 情報モラル講座用教材 5

炎上が起きると・・・

- 炎上発生
- **個人情報**の特定
- 情報の拡散
- 学校や内定先に連絡
- 退学停学処分や内定取消し

事前に上手に検索して確認しておくことでこのリスクを軽減！

図 6.6: 情報モラル講座用教材 6

炎上が起きると・・・

- **炎上発生**
- 個人情報の特定
- 情報の拡散
- 学校や内定先に連絡
- 退学停学処分や内定取消し

そうしたリスクを知ること
で炎上のリスクも少なくなります！

図 6.7: 情報モラル講座用教材 7

自分の情報を検索してみよう！

入力例

金谷 武明

または

Takeaki Kanaya

図 6.8: 情報モラル講座用教材 8

インターネット検索の基本

- 検索の仕組み
- 便利な検索方法

図 6.9: 情報モラル講座用教材 9

検索エンジンの仕組みについて

みなさんが検索をすると、検索エンジンは即座に結果を表示します。それでは、検索の前後に何が行われているのでしょうか？

- 検索の前に何が行われていると思いますか？
- 検索のあと、表示するまでの間にどんなことが行われていると思いますか？

図 6.10: 情報モラル講座用教材 10

検索エンジンの仕組みについて

検索の前に行っていること

情報の収集(クローリング)

- 情報の収集ウェブページを訪問し、事前に情報を集めます。

索引の作成(インデックス)

- 収集した情報を整理し、索引を作ります。

検索後に行っていること

検索結果の配信

- キーワードを入力し検索すると、そのキーワードと関連性の高い情報をインデックスから取り出し、関連性の高い順番に表示します。

図 6.11: 情報モラル講座用教材 11

検索できない情報について

インターネット検索で探せない情報にはどのようなものがあるでしょうか？

図 6.12: 情報モラル講座用教材 12

検索できない情報について

インターネット検索で探せない情報にはどのようなものがあるでしょうか？

- クローラーがアクセスしていない情報
 - インターネットに存在しない情報
 - インターネットに存在している情報でも、
 - 最近更新されたばかりのページの情報
 - クローラーがアクセス出来ない情報
 - アクセスするのにパスワードなどが必要な情報
 - クローラーのアクセスを禁止しているページ
- クロールされていてもまだインデックスされていない情報
 - 最近更新されたばかりのページの情報など

図 6.13: 情報モラル講座用教材 13

3つの便利な検索方法

- マイナス検索
- フレーズ検索
- 特定のサイト内の検索

図 6.14: 情報モラル講座用教材 14

便利な検索方法 - マイナス検索

マイナス検索

「[Apple](#)」について検索してみましょう

図 6.15: 情報モラル講座用教材 15

便利な検索方法 - マイナス検索

Apple -iPhone

※-は半角

図 6.16: 情報モラル講座用教材 16

便利な検索方法 - フレーズ検索

フレーズ検索

フレーズ「[would it be possible if you think](#)」
で試してみましょう

図 6.17: 情報モラル講座用教材 17

便利な検索方法:フレーズ検索

"would it be possible if you think"

※半角の""で括る

図 6.18: 情報モラル講座用教材 18

便利な検索方法:特定のサイト内の検索

特定のサイト内の検索

[Twitter上の自分の情報を検索してみましょう!](#)

図 6.19: 情報モラル講座用教材 19

便利な検索方法:特定のサイト内の検索

名前 学校名 site:twitter.com/

Keywords + site:URL

図 6.20: 情報モラル講座用教材 20

便利な検索方法:組み合わせ可能！

名前 学校名 -site:twitter.com/

Keywords + -site:URL

図 6.21: 情報モラル講座用教材 21

色々検索してみよう！

図 6.22: 情報モラル講座用教材 22

1. まず、名前をそのまま検索してみよう
入力例: 金谷武明
 2. 「金谷〇〇さん」「〇〇武明さん」のような結果を回避する - フレーズ検索
入力例: "金谷武明"
 3. 同姓同名問題を解決する方法。 - マイナス検索
入力例: "金谷武明" -ボクシング
 4. 自分とある特定の組織のつながりがインターネット上で特定されないかを確認するためにキーワードとして所属する組織名を追加して検索してみる
入力例: "金谷武明" Google
応用1: "金谷さん" Google 応用2: Jumpingknee Google
 5. ある特定のドメイン内の検索方法
入力例: "金谷武明" site:twitter.com
- 応用として、
- ニックネームやアカウント名、ハンドルネームを調べてみよう！
 - オプションを組み合わせよう！

図 6.23: 情報モラル講座用教材 23

もし、気がかりな情報を見つけたら

自分で解決しようとせず、先生やご両親など大人に相談しましょう

図 6.24: 情報モラル講座用教材 24

もし、気がかりな情報を見つけたら

- インターネット上の情報を削除・修正できるのは、基本的にそのコンテンツを投稿した人だけです。
- 投稿者を確認しましょう。
 - 自分自身なら、削除・修正する。
 - 友人なら、削除・修正を依頼する。
 - 見知らぬ第三者の場合は、先生に相談しましょう。

図 6.25: 情報モラル講座用教材 25